バカと軍師と召喚獣

劉子　文

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと軍師と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ７１８３Ｖ

【作者名】
劉子　文

【あらすじ】
かの有名な軍師の姓を持つ少女諸葛凛。彼女はその姓に違わぬ智謀の持ち主だった！ただしテストの点数はその限りではない！明久の幼馴染である彼女がＦクラスに置いてその智謀を発揮する。「今私を諸葛亮って呼びましたね。５秒以内に訂正しなさい。さもなくば貴方の人生に無数の罠を仕掛けて破滅させます。」

第1話（前書き）

バカテスシリーズは初投稿です。
長期連載停止作品抱えてるくせに新作投稿します。
どうか温かい目で見守ってください。

第1話

バカテスト
第1問
『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点…マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点

合金の例…ジュラルミン』

教師のコメント
正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね

土屋康太の答え

『問題点…ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金例…未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

諸葛凛の答え

『問題点…熱の浸透力が足りなかった

合金の例…ダークマター

教師のコメント

浸透力云々ではありません。後鍋になんてもの使おうとしてるんですか。

ある平日の朝、文月学園の通学路を走る一組の男女がいた。

「明久、君の寝坊癖はまだ治らないんですか？いやドラモンクエスト１０は確かに面白いけど。」

「あははっ、どうしてもモグリメタルが出なくてさ。」

「全く君は……兎に角急ごう。時間的には遅刻だ。」

二人は走りようやく文月学園の校門前に着いた。

そこには一人の男性教諭が立っていた。

「遅いぞ吉井！諸葛！」

「おはようございますにしむ……鉄人先生！」

「すみません。そしておはようございます西村先生。」

「諸葛はいい。だが吉井！何故言い直した。」

「え？だって鉄人は鉄人でしょう？」

「はぁ……もういい。諸葛、お前はまた吉井に付き合わされたのか？」

「正確には私が彼に付き合ったというのが正しいですね。」

「そうか、だが遅刻はいかんぞ。」

「はい。気を付けます。」

彼女は諸葛凛。
中国の有名軍師と同じ名字だが純粋な日本人である。
癖の無い黒髪を背中まで伸ばしており体は小柄ではあるが出るところはキチンと出ていた。
そして走っている間は外していた眼鏡を取り出して掛ける、ちなみに伊達眼鏡だ。

「吉井も諸葛にあまり迷惑をかけるなよ。」

鉄人の言葉に吉井は苦笑いして頭を掻くばかりだ。

「まあいい、受け取れ。」

二人に対して差し出された茶封筒を受け取りそれを開いていく。

「諸葛、お前またテスト中に別の事を考えていたな？」

「すみません。頭の中に素晴らしい軍略が思いついてしまい思わずそっちに没頭してしまいました。」

「はあ、それさえなければお前はAクラスに入ることも出来たろうに。そして吉井！俺は今までお前はバカなんじゃないかと疑っていたんだ。」

「むっ失礼な。それは大きな間違いです。そんなんじゃ生徒に『節穴』なんていう渾名付けられちゃいますよ。」

「そうだな、今回の振り分けテストの結果でそれが良くわかった。」

諸葛凛　Ｆクラス

吉井明久Ｆクラス

「吉井、お前は正真正銘疑いようのないバカだ。」

「可笑しいなぁ、少なくともＣクラスは行けると思ったのに。」

「私としてはむしろ納得ですけどね。」

「む！幼馴染だからってそれは酷いんじゃない？」

「テストの前日は勿論その前も夜中までゲームやってた人が何を言いますか。」

「……ハイパーストリートファイターのネット対戦は楽しいんだ、それに久々に４２連勝も出来たんだよ。」

「その努力の十分の一ずつを勉強と生活態度の改めに使ってはくれませんか？」

じとーと横目で睨まれた明久はあははっと苦笑いしながら善処するよと言った。

凛がため息をつくと二人は大きな教室の前に付いた。

通常の教室の５倍はあろう教室に巨大なプラズマディスプレイ、専用のノートパソコンエアコン冷蔵庫お菓子にお茶や珈琲まで完備されていた。

「……ねえ凛。ここ学校だよね？ホテルのスイートルームじゃないよね？」

「……スイートルームは泊まったこと無いのでわかりませんが流石Ａクラスというべきなんでしょうね。」

文月学園は試験召喚獣という科学とオカルトと偶然で完成したシステムを用いており、それを使って生徒の学習意欲を上げようとしている。

具体的にはＡ～Ｆクラスの設備に差をつけることで、より良い環境で勉強したければテストで点を取ってクラス間の『試験召喚戦争』に勝利して相手のクラスの設備を奪いとれということだ。

そのテストも１００点満点ではなく制限時間内に何枚ものテストを受けることが出来るのでＡクラスともなれば２００～３００点持ちが普通にいる。

「そしてこれが我らがＦクラスと。」

「……Ａクラスがスイートルームだとしたらこちらはプレハブ小屋、いえプレハブ小屋より酷いかもしれませんね。」

２―Ｆと書かれた標識さえ今にも外れかけてるのを見るとその酷さが伺える。

「とりあえず入りましょう。」

「そうだね、すみませーん遅れちゃいましたー。」

「遅いぞ、うじ虫野郎。」

「なんだとぉ！」

教壇に立っていた赤い髪の男子生徒の言葉に明久が食って掛かるが凛に襟を掴まれて引き戻される。

「明久、初日からクラスメイトと騒ぎを起こすのは感心しませんよ。後雄二も態々挑発なんてしないでください。」

「わりぃわりぃ。でも相変わらず凛に手綱を取られてるんだな明久。」

「うるさいぞ雄二！」

「すみません、通してもらえますか。」

「あ、すみません。雄二、席順は？」

「自由だそうだ。」

後からやってきた眼鏡の先生に言われて三人は適当に座布団に腰を

下ろした。
ちなみにFクラスの設備は卓袱台に座布団、畳と昭和を思わせる設備だが生憎質というか状態が悪い。
「2年Fクラス担任の……福原真です。よろしくお願いします。」
何故か黒板の方を振り向くがすぐに前を向いた。
「ねえ雄二、黒板に名前書かないのかな？」
「さっき確認したらチョークのクズはあった。」
「……予想以上にひどいね。」
「えー皆さんに卓袱台と座布団は支給されてますね。不備があったら言ってください。」
「俺の座布団綿が入ってないんですけど。」
「我慢してください。」
「卓袱台の足が折れてます。」
「木工用ボンドが支給されているのでそれを使って自分で直してください。」
「窓が割れてて隙間風が寒いんですけど。」
「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので後で直してください。」

そのほか色々あがるが全て”我慢してください”か”後で直してください”だけだった。
改めてFクラスの設備の最悪さを思い知った。

「では、必要なものがあったら極力自分で用意してください。では廊下側から自己紹介を。」

「木下秀吉じゃ、演劇部に所属しておる。今年一年よろしく頼むぞ。」

立ち上がったのは男子という事が制服を見てかろうじてわかるほどの可憐な容姿をした生徒だった。
話し方と見た目のギャップに萌えている生徒が多い事は本人は知らない。

「……土屋康太。」

続いて立ちあがったのはやや暗い雰囲気の男子生徒。
しかしこの文月学園内に置いては最大のシェアを誇るムッツリ商会を経営するやり手である（褒め言葉ではない）

「島田美波です。海外育ちで日本語での会話は出来るけど読み書きは苦手です。あ、英語も苦手です。育ちはドイツだったので……趣味は」

そこで区切るとちらりと明久を見て

「吉井明久を殴る事です。」

その発言に明久は僅かにビクついた。

「はろはろ～」

余りにもバイオレンスな発言の後にあまりにも親しげな台詞……明久はビビりつつも手を手を振りかえす。
しかし完全に腰が引けているので隣に座った凛が声をかける。

「大丈夫です。危険な時は止めに入りますから。」

「ありがとう凛。君は女神だ。」

「大げさですよ。」

明久の発言にも凛は照れる事無く微笑んで返す。

「おっと私の番ですね。名前は諸葛凛です。ちなみに私を孔明なんていう軍師というより祈祷師とか占い師の方が似合っている奴みたく呼んだらその後の高校生活を破滅させてやりますのでご理解を。呼ぶなら同じ諸葛でも子喩とか公休と呼んでください。」

ちなみに子喩は諸葛亮の兄の諸葛謹の字で公休は従弟の諸葛誕の字である。

「「「「子喩ちゃ～～～～ん！！」」」」

「「「「公休さーーーーーん！！」」」」

「なんでしょう？」

「「「「「「「「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！！眼鏡っ子萌えええええええええええ！！！！」」」」」」」

予想通りというかFクラスらしくバカばかりである。
そして順番は進んで明久の番。

「こほん、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さい。」

「「「ダァァーーリィーーン！！」」」

野太い声の合唱がFクラス中に響いた。
勿論狙ったとはいえあまりにも大きな反応に明久は顔をひきつらせ凛も顔をしかめていた。

「失礼、忘れてください。」

凛は内心溜息をつきつつ思案していた。

（自己紹介の反応から見て結束力は全クラス一ですね。まあ他のクラスが男女の数がほぼ同じだったりするのに対してこっちは過半数が男子ですから自然なのかもしれません。個の能力は低くても連携などで十分に補えるでしょう。ふふっ、これなら私の知略も活かせそうです）

そんな風に考えていた凛の耳にクラスメイトの話し声が聞こえる。

「そういえば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに。」

「ああ、化学だろ。あれは難しかったよな。」

「俺は弟が事故にあったと聞いて、実力を出し切れなくて。」

「黙れ一人っ子。」

「前の晩、彼女が寝かせてくれなくて。」

「今年一番の大嘘をありがとう。」

（大……丈夫ですよね……いけませんね。初日から不安ばかりです。）

凛は思わず眼鏡を押さえて苦々しい表情をしてしまう。

そこへ不意に明久が飛びついてきた。

「うわぁ！？なんですか明久！？」

「凛！同性から思いを寄せられてるんだけどどうすればいい！？いやむしろ対処をって右足がねじ切れるうううううう！！！」

「アンタ何女子に飛びついたりしてんのよおおおおおお！！！」

後ろから美波に右足をねじられ明久はもがいているが凛としてもいきなり飛びつかれて驚いていたので仕返し代わりに放置していた。

「はいはいそこの人たち静かにしてくださいね。」

バンバン…バキィ！

音からして大した力で叩かれて無いのにも関わらず教壇は壊れてしまった。

「え～代えを持ってきますので皆さんは自習していてくださいね。」
先生が出て行ったところでようやく明久は解放された。
「ひ……ひどい目にあった……」
「明久……自業自得だよ。まあ同性から思いを寄せられているなんて知ったら当然かもしれないが男女七歳にして寝所同じにせずという言葉もある通り私たちはもう高校2年だ。旧知とはいえ別に付き合ってるわけでもない男女が抱き合うのは問題が多い。教室でクラスメイトがいるならなおさらね。いや教室以外、クラスメイトがいなくても同じことだ。明久は私の親友だが今のような社会的に醜聞となりえる様な行動は慎んでくれると助かる。君も要らぬやっかみを受けたくないだろう？」
「うん、ゴメン。ちょっと気が動転していた。」
「反省しているなら許すよ。ところでそこにいる可愛らしい女の子は誰だい？島田さんならFにいるのはわかるけど君のような成績低迷者はいなかった気がするんだが。」
「ちょっと待ちなさい！誰が成績低迷者よ！！」
「ん？Fクラスにいる。それ以外に証明の必要があるかな？」
「きぃいいいいいいいい！！！反論できない自分が憎いわ！！」
「あ、えっと。姫路瑞希です振り分け試験の時体調不良で途中退室してしまって。」

文月学園のテストに置いて途中退席は強制０点となる。
とはいえ彼女の場合情状酌量の余地はありそうだがどうやら担当の教師は厳しい人だったようだ。

「なるほど。体調管理には注意した方がいい。特にＦクラスはお世辞にも良い環境とは言えないからね。まあ人間の適応力を持ってすれば慣れるのかもしれないが……免疫や抵抗力に関しては個人差があるからね。おっと、申し遅れたが諸葛凛だ。孔明とは呼ばないでくれよ。」

「は、はい。よろしくお願いします諸葛さん。」

そこで凛は瑞希を見て、次に美波を見てから教室を見渡す。

「ふむ…女子は３人だけか。確か１クラス４０人ほどだから３７：３……色々と厄介事が起きそうな予感がするな。」

「？４人じゃないんですか？」

「諸葛、木下を忘れてるわよ。」

「ん？なんじゃ。」

二人の発言にひかれるように秀吉がやってくる。

「実はね、諸葛がクラスの女子は３人だって言うから４人だって訂正してやったのよ。」

「いや、秀吉は見た目こそ女の子だが男だろう？」

「凛……わしを男だと言ってくるのはお主だけじゃ……」

「秀吉……辛くなったら言ってください。力になりますから。」

「すまぬ。」

恐らく初対面であろう瑞希にまで早くも女子扱いされている秀吉に凛は同情した。

しかしこの場合付き合いのある美波に女の子扱いされるのと付き合いの無い瑞希に女の子扱いされるのはどちらが酷いのだろうか。

その時、教室のドアが開いていつの間にか廊下に出ていた明久と雄二が入ってきた。

第2話（前書き）

前書き間違えました。

Dクラス戦は次回です。

第2話

戻ってきた先生が最後に雄二に自己紹介を促す。
雄二は教団の前に立つと教室を見渡して言った。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺の事は坂本でも代表でも好きに呼んでくれ。さて……皆に一つ聞きたい。」

そこで言葉を区切るとゆっくりクラスメイト全員の目を見るように告げる。

「かび臭い教室に古く汚れた座布団、薄汚れた卓袱台……Aクラスは冷暖房完備の上座席はリクライニングシートで冷蔵庫まである。」

「不満はないか？」

「「「大ありじゃぁっ！！」」」

クラスメイトほぼ全員の魂の叫びだった。

「だろう？俺だって不満だ。このクラスの代表として大いに問題意識を抱いている。」

『いくら学費が安いからってこの設備はあんまりだ！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費の筈だ！あまりにも差が大きすぎる！』

『そうだ！そうだ！』

「皆の意見はもっともだ。そこでこれは俺の代表としての意見なんだが……

Ｆクラスは“試験召喚戦争”を仕掛けようと思う。」

凛視点

なるほど、先ほど廊下に出ていたのはこれの事ですか。
理由は不明ですが恐らく明久と雄二の二人が共にＡクラスの打倒を目標としたため相談していたんでしょうね。
発案明久、内容雄二といった感じで。

でもまあ……この反応が普通ですよね。

『勝てるわけがない！』
『これ以上設備が落とされるなんて嫌だ！』

『姫路さんがいたらもう何もいらない！』
『諸葛さんとイチャイチャしたい！』
……もう少し欲望を抑える努力をすべきでは？
でもまあ当然ですよね、勉強が出来ないからここに居て、対するは勉強が出来る人たち。
勝率なんて０に等しい……いえ０でしょう。
「皆がそう思うのも無理はない。だがだがこのクラスには、勝てる要素が揃っているからこその発案だ。今からそれを証明してやる。」
ほう、聞かせてもらいましょう雄二。
その勝因とやらを。
「おい康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い。」
「……！！（ブンブン）」
「は、はわっ」
必死に顔と手を振って否定してますけど思いっきり見られてましたし顔に畳の跡がついてますから……それでも誤魔化そうとしている辺りがあの名前の由来なんでしょうね。
「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性識者（ムッツリーニ）だ。」
「……！！（ブンブン）」
土屋康太という名前は有名ではないんですよね（明久なんて本名を

覚えているかも怪しいですし）。しかしムッツリーニという名前は別。
その名前は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以って挙げられているんです。
ちなみに私は呆れと少しの尊敬です。
呆れは怒られたりカメラを没収されても懲りないところ、尊敬は自分の好きなことをとことん極めているところですね……将来は覗き魔とか盗撮犯じゃなくて探偵とか警察とかになって欲しいものです。

『ムッツリーニだと……？』
『バカな、奴がそうだと言うのか……？』
『だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……』
『ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ……』
『？？？』

Fクラスの男子は順応が速いですね……そして姫路さんはそのままでいてくれると助かります。

「姫路の事は説明するまでも無いだろう。みんなだってその力は良く知っているはずだ。」

「えっ？わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している。」

Aクラスに入ればあの霧島翔子と互角に渡り合えると言われている姫路瑞希……操作性や他との連携は兎も角その攻撃力、突破力は計り知れないでしょう。
とはいえ個人的には一人の猛将より多くの勇将の方が好ましいんで

すけどね。軍略的な意味で。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった。』
『彼女ならAクラスに引けをとらない。』
『ああ。彼女さえいれば何もいらないな。』

……さっきから姫路さんにラブコールを送っている人がいますね。

「木下秀吉だっている。」

演劇のホープである秀吉は学力は兎も角演義に関しては有名ですし役に立ってくれそうですね。

『おお……！』
『ああ。アイツ確か、木下優子の……』

「当然俺も全力を尽くす。」

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』
『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか。』
『実力的にはAクラスが二人もいるってことかよ！もしかしたらやれるんじゃないか？』
『ああ、なんだかやれそうな気がしてきた！』

……本当にそうなんでしょうか。
彼が神童と呼ばれていたのは小学生の頃、中学ではあまりいいうわさは聞いてませんし文月でもそこまで凄いとは聞いたことないような……

「それに吉井明久と諸葛凛もいる。」

おや、ここで私と明久ですか。

『諸葛……聞いたことないぞ。』

『それを言ったら吉井明久だって無いぞ？』

「諸葛凛は学力は秀でてないが古今東西ありとあらゆる歴史書に軍略書を読み漁る軍略家だ。きっと諸葛の名に恥じない策を見せてくれるはずだ。」

雄二……それはあまりにも過度な期待という奴ですよ。確かに孫子は勿論墨子なども読みましたし甲陽軍鑑とかアレクサンドリア大王やアーサー王にハンニバル、上杉謙信、北条早雲、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康、源義経、源義家、平清盛や足利尊氏などなど歴史上の名将は勿論竹中半兵衛や周瑜や司馬懿などの智将の伝記なども読みましたから知識はあると思いますが……実用となると期待こたえられるかどうか……

『なるほど、頭脳派か……』

『ああ。見た目とも会っていて素晴らしいな。』

『となるとなおさら吉井明久って誰だ？』

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前まで呼ぶのさ！凛だけでいいじゃないか！」

「ちなみにそこの吉井明久は”観察処分者”だ。」

「……それってバカの代名詞じゃなかったか？」

「違うよ！ちょっとお茶目な１６歳につけられる愛称で「そうだ、バカの代名詞だが。ハンデにはちょうどいい。」雄二キサマ！僕をはめたな！！」

んー個人的にはハンデというよりそれなりの統率と武力を備えた使える人だと思うんですけどね。

「兎に角だ。俺たちの力の証明としてまずはＤクラスを征服したい。皆、この境遇には大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆を取れ！出陣の準備だ！」

『おおっーーー！！』

「俺たちに必要なのは卓袱台ではない！システムディスクだ！！」

『うおおおっーーーー！！！！』

「お、おー」

男子の雰囲気に飲まれた姫路さんが小さく手を挙げてますね……こういうの眼福と言うんでしょう。

「明久にはＤクラスへの宣戦布告の為の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の使者って、大抵酷い目に遭うよね？」

「大丈夫だ。騙されたと思って行ってみろ。俺は友人を騙す事はしない。」

「わかったよ、じゃあ使者は僕がやる。」

「私も着いて行きますよ。敵情視察もかねて。」

「……わかった。だが宣戦布告したらすぐに逃げろよ。」

「おい待て雄二！それって危険って事じゃないか！！騙したな！僕の信頼を裏切ったな！！放して凛！僕はアイツを殴らないといけないんだあああああ！！」

雄二視点

「ただいま……」

「無事だったか凛……おい、どうした明久？」

「いや……宣戦布告と同時に襲われたけど凛に引っ張られて助けら

れた……おまけに凛が常備してる携帯型警棒兼指揮棒で牽制してくれたから無事だったんだけど……女の子に守られっぱなしの僕って……」

なるほど、凛の勇猛さと度胸は並の男以上だからな。
集団とはいえ同級生でしかも校内だからそこまで派手な行動は出来ないだろうから凛にしてみれば怯む要素なんて皆無だったんだろう。
しかし警棒兼指揮棒って物騒なものを。

「よくやった凛。しかし何で警棒なんか持ってんだ？」

「正確にはスタンロッド兼指揮棒ですが。護身用と2年での試験召喚戦争用です。指揮するときにはこういった物があった方がやり易いですし……私は形から入る性質なので。」

なるほどな。
しかし護身用と言えども物騒だな。

「とりあえず主要メンバーは屋上に集合だ。そこでミーティングを行う。」

屋上へと向かう途中凛の奴が戦争時の役割について相談してきた。

「とりあえず私は前線で総指揮を執ろうと思います。正確には前線部隊と中堅部隊の間辺りで。」

「そうだな……というかそれでいいのか？俺としてはお前には本陣で策を練って欲しかったんだが。」

「生憎ここは特殊な地形と呼べるものがありません。精々階段や空

き教室を使った奇襲程度で思い切った策が使えないんです。後は態と退却して十面埋伏の計か釣の伏せ位です。」

なるほどな。奇策を弄しようにも地形的に難しい。だったら指揮能力で勝率を挙げようって魂胆か。

「だが危険だぞ？相手だってそれに気づけばお前を集中的に狙う筈だ。」

「ご安心を。点数はそれなりに取れると思いますから簡単にはやられません。それに烏合の衆がいくら集まったところで正規兵には勝てないんですよ。」

「大した自信だな。」

「それほどでも。」

そういって微笑む凛だが……全く、こいつは親しくなると途端にガードが緩くなりやがる。

俺も翔子の事がなけりゃ惚れていたかもわからんな。

っといけねえ、アイツの事なんてどうでもいいんだった。

それより目の前の戦争の事だな。

「何やってんだ雄二ー！りーん！」

たくあのバカ。あんなデカい声を出さなくってたって聞こえるつーの。

まあいい、さっさと行くか。

「じゃあ期待してるぜ。名指揮官兼名軍師様。」

「お任せください。総大将。」

話を終えた俺と凛は明久たちに追いついた。

「雄二。凛となに話してんだ？」

「何、Dクラス戦に備えての相談だ。屋上で昼飯喰いながらでも話してやるよ。」

からかってやってもいいんだが凛もいるしどうせすぐにバレルだろうから正直に話してやる。

「わかった。けど雄二、やるからには勝つからな。」

「当然だろう。」

明久のバカめ、このメンバーで負ける方が可笑しいだろ。

第3話（前書き）

Dクラス戦です。

第3話

問題

『以下の英文を訳しなさい。

Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｌｙ』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です。』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

『これは　　』

教師のコメント

訳せたのはＴｈｉｓだけですか。

吉井明久の答え

『☆●◇▽「♪＊×」

教師のコメント

できれば地球の言語で。

諸葛凛の答え

『ディスイズザブックセルフザットマイ祖母ハッドユーズドレグラリィイ」

教師のコメント

訳すとはそういう意味ではありません。後何故祖母だけ。

「で、明久。時間は伝えたのか？」

「うん。今日の午後からって伝えておいたよ。」

現在明久らＦクラスの主要メンバーは屋上で昼食をとっていた。

「じゃあ明久、今日くらいはまともな飯を食えよな？」

「そう思うならパンの一つくらい奢ってくれると嬉しいな。」

「明久は生活費の大半を趣味に注ぎますからね……普通水と塩だけでは生きられませんよ。」

「失敬な。ちゃんと砂糖も食べてるよ。」

「明久、砂糖は食べるとは言わんじゃろ。」

「……異常。」

明久の食生活に秀吉と康太も呆れ顔になる。

「ふう……もう少し体を気遣って欲しいですね。私のコロッケパンをあげますから水と調味料だけなんて食生活からは早く脱却してくださいね。」

「あはは……頑張るよ。」

凛からコロッケパンを受け取った明久は袋を開けてかぶりついた。

「ん～お肉なんて何時振りかな？」

「……どうやら本格的に明久の生活改善が必要のようですね。草案を纏めておくとしましょう。」

凛の幼馴染への呆れはついにそこまで至るほどだった。

もしこの台詞を女子二人が聞いたら何が何でも関与するか止めさせたかもしれないが生憎というか幸いというか誰にも聞きとられずに消えて行った。

「……あの、よかったら私がお弁当作って来ましょうか？」

「え……ほんとにいいの？」

「はい、明日のお昼で良ければ。」

「ありがとう姫路さん。」

基本的に摂取カロリーの少ない（完全な自業自得だが）明久にとってお弁当を作ってもらえるというのは大量のカロリー摂取の機会なのでかなり楽しみだった。
無論女子の手作り弁当というのも魅力的だが……そこから恋愛云々へは決して繋がらないだろう。

「ふ～ん……瑞希って随分優しいんだね。吉井にだけ作ってくるなんて。

「あ、いえ！皆さんの分も作ってきましょうか？」

「いいのか？」

「それは楽しみですね。クラスメイトのお弁当ですか、どんなのなんでしょうね。」

全員が姫路のお弁当を楽しみにした。

「さて雄二。そろそろ本題に入りましょう。」

「そうだな、といっても相手はＤクラス。大した事は無い。」

「ところで雄二。何故Ｄクラスなのじゃ？段階を踏むならＥクラス、

直接勝負ならＡクラスじゃろ？」

「そういえばそうだね。」

秀吉の疑問はもっともだった。

外堀から本丸を目指すようにいくならＥクラスを狙うべきであり直接本陣を攻めるならＡクラスに宣戦布告すべきである。

二人の視線を受けた雄二は笑みを浮かべながら説明する。

「理由はいくつかあるがＥクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでも無い相手だからだ。」

「？どうして、僕たちよりクラスは上だよ？」

「確かに振り分け試験時はそうでした。しかし次テストを受けたときＥクラスがＦクラス級、ＦクラスがＥクラス級の点を取らないと絶対に言えますか？答えはＮＯです。調子や問題によって得点は大きく変動するでしょう。」

「それにだ。明久、今お前の周りにいるメンツを良く見ろ。」

そう言われて明久は屋上にいるメンバーを見渡す。

「美少女が３人にバカが２人、ムッツリが一人いるよね。」

「誰が美少女だと！」

「何で雄二が美少女に反応するのさ！」

「……（ポッ）」

「くっ！確かに私はバカと呼ばれても仕方ない学力ですが……世界史と日本史、それに古典だったら自信があります！」

「凛にムッツリーニまで！？どうしよう、僕のツッコミ能力じゃ対処しきれない！」

「まあまあ、落ち着くのじゃ皆の衆。」

秀吉の取り成しで何とか静まったが恐らく態とであろう雄二と康太に対して

「確かに数学や化学に関しては明久よりも点数は低いですが……いえあれは数字が多いのが問題なんです。数字ではなく文字が多ければ、答えが曖昧でいいなら私だって……」

凛は割と本気で自分をバカだと思っているようだ。

「要するに、姫路に問題が無い以上正面からやりあってもEクラスには勝てる。俺たちの目標はあくまでもAクラス。Eクラスとやりあっても得るものはない。だったらやる必要はないだろ？」

「ならDクラスとやりあう事に意味があるの？」

「ああ。Dクラス戦はAクラス打倒に必要なカギだ。それに派手にやって景気づけしたいしな。」

「なるほど、本来なら勝てないようなDクラスに勝つことで士気を高めるのじゃな。」

秀吉の言葉にうなずくと雄二は力強い笑みを浮かべて言い放った。
「お前らが協力してくれれば必ず勝てる。いいか、ウチのクラスは……最強だ。」
その言葉に明久、秀吉、康太、凛の４人はそれに答えるように力強く頷き、美波と瑞希も遅れて頷いた。
「よし、作戦を説明する。」

そして昼休みの後、Ｄクラス対Ｆクラスの試験召喚戦争が始まった。
開戦同時にＤクラスはＦクラスの教室目がけて突撃していく、総数およそ２０人。
対するＦクラスの先鋒は１５人と人数的にも点数的にも不利だった。
「来ましたね……総員迎撃準備、私の指示を聞き逃さない様に。聞き逃して戦死したら罰ゲームとかそんな人によってはご褒美になり

そうな真似はしません。ただ西村先生の補習を倍にしてもらいます！嫌でしょう？私も同法たる貴方たちをみすみす死地に赴かせるような真似はしたくありません……ですから皆さん、私の指揮のもと死力を尽くしてください！」

「「「うおおおおおおおおお！！！」」」

Fクラスの特徴である単純を逆手に取った見事な激励だった。西村先生……通称鉄人の補習を倍にするという鞭で追い込んで、女子に頼りにされるという飴で裏切りや逃亡を抑え込む、今この場においてFクラスの意気はDクラスを遥かに上回った。

「まずは敵の出鼻を挫きます。総員抜刀！試獣（サモン）召喚！」

教師の承認を受けてフィールドが展開されるとFクラス全員が召喚してDクラスに襲い掛かる。

『化学　Fクラス　平均６０×１５　ＶＳ　Dクラス　平均８０×５』

「「「「「なっ！うわあああああ！！！」」」」」

とっさに反応できたのは僅か5人だけ、いかに点があっても数の暴力には耐えられず瞬殺される。

「いいですか、鈍器・長柄の持ち主は主に敵の手足を！刃物系の持ち主は体制が崩れた敵に止めを刺してください！そこ！敵の召喚獣が迫ってます、３０？後退！君は福村君の援護を！」

「「「おう！！」」」

凛の的確な指示とFクラスの士気の高さにより比較的善戦出来ていた。
しかし地力の差もあって徐々に押し込まれていく。
「第2第3小隊は中堅部隊が来るまで前線を維持！第1小隊は後退して救援要請と補給を！」
Fクラスの一部が後退した瞬間Dクラスの一部が前線を突破して凛へと襲い掛かる。
「くっ！止むをえません！試獣召喚！」
召喚されたのは真っ白く、ゆったりと衣装来て包帯で口元を隠したデフォルメされた凛。
右手には白い羽扇のような剣……ぶっちゃけ無双6の諸葛亮とホウ統を足して2で割ったような衣装に無双5の時の諸葛亮の武器が常時近接用になった感じである。
『諸葛凛　29点』
しかし残念ながら指揮能力は高くてもテストの点は今一だった。
「もらった！」
「甘いですよ。」
振り下ろされる刃を体を逸らして躱すと一瞬のすきをついてその首を刎ね飛ばした。
無論首を刎ね飛ばされた召喚獣は残っていた点も相手の点も関係な

く戦死である。

「西村先生、戦死者一名追加です。」

「うむ、その様だ。」

いきなりあらわれた鉄人に驚く驚くDクラスの生徒。

「さぁ来い！この負け犬！」

「て、鉄人！？嫌だ！補習室は嫌なんだ！」

「黙れ！捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな。」

「た、頼む！見逃してくれ！あんな拷問耐え切れる気がしない！」

「拷問？そんなことはしない。これは立派な教育だ。補習が終わる時には趣味は勉強、尊敬する人は二宮金次郎、といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう。」

「お、鬼だ！誰か、助けっ――――イヤァァ――――（バタン、ガチャ）」

（西村先生……それは最早教育という名の洗脳かと。）

連行されるDクラスの生徒を見て少しだけ背筋が寒くなった凛だった。

「え、Ｆクラスの癖にＤクラスを一撃だと！？」

「どうなってんのよ！？」

「ふふっ、さぁて何ででしょうね。」

思わせぶりな凛の言動に思わず尻込みするＤクラスの生徒、そこへ

「それ以上はやらせぬぞ！試獣召喚！」

「お待たせ凛！行くぞ！試獣召喚！」

『化学　諸葛凛＆吉井明久＆木下秀吉　２１点＆６１点＆４２点
ＶＳ　Ｄクラス２名　７８点＆８９点

戦列から援護に来た秀吉と中堅部隊の明久が援護に現れる。

「ナイスタイミングです。」

秀吉の薙刀による牽制と明久の操作性よって動揺したＤクラスの１人は凛の一撃で首を刎ねられ、もう一人も明久の一撃を受けた後に秀吉によって止めを刺された。

「来ましたね明久と中堅部隊の皆さん！先鋒の皆さんは第２小隊から後退！その後第３小隊も後退してください！前線は下げても構いません！ですが突破は許さない様に！」

「くそっ！このままじゃジリ貧だ！一点に集中して前線を突破！そうして彼女を討ち取るんだ！！」

「させませんよ。明久、止めはいりません。１０秒間敵先鋒の足止めを。」

「了解！！」

明久の召喚獣が突破しようとした生徒の召喚獣の足を払って転倒させる。

それにより後続もつっかえて突破できずＦクラスの先鋒は後退に成功した。

「大丈夫凛？」

「ええ、それよりも島田さんが危険なようですね。」

見ると廊下の隅で美波がツインテールの女子生徒に追い込まれていた。

『お姉さまに捨てられて以来、美春はこの日を一日千秋の思いで待っていました……」

『ちょっと！いい加減ウチの事は諦めてよ！』

『嫌です！お姉さまはいつまでも美春のお姉さまなんです！』

『来ないで！私は普通に男が好きなの！』

『嘘です！お姉さまは美春の事を愛しているはずです！』

『このわからずや！』

『化学　島田美波　５３点　ＶＳ　清水美春　９４点』

どうやら性癖や言動は兎も角成績は優秀な方であるようで美波は追い込まれていった。

「どうしよう……島田さんが遠い。」

「……須川君、彼女の隙を見て攻撃を。ただし一撃で決めてください。」

「はっ！」

凛の指示で須川は戦線から離れて美春の隙を窺う。
そして美春が美波の召喚獣に剣を突き付けて勝利を確信したところで攻撃。
美春は戦死して鉄人に連れて行かれた。

「た……助かったわ諸葛に須川君。」

「気にしないでください。現状において敵戦力の削減は急務ですから。それに点数的に一人戦死するだけで戦線が崩壊しますからね。Ｆクラスは。」

「……そうね、じゃあ私も前線に行くから。」

「お願いします。」

美波が前線に出たことと美春の戦死で何とかＤクラスを抑え込んだＦクラスだが、Ｄクラス側にも援軍が現れ塚本という生徒が指揮を執り始めたころから徐々に劣勢になり始めた。

「くっ！不味い……戦力差がどんどん顕著に……なんとか前線を狭めないと……」

『斥候より連絡！Ｄクラスが立会人として船越先生を呼んだ模様！』

『本陣より連絡！無事田中先生が到着！また現在接近中の教師に関しては任せよとのこと！』

（雄二……何か策があるんですね。わかりました。）

「わかりました。何とか前線を維持すると。」

伝令係の横田が走り去るのを見送ると凛は再び指揮を執る。

そして伝令が来てから数分後

ピンポンパンポーン

『連絡致します。』

『船越先生、船越先生』

『根本恭二君が体育館の裏で待っています。』

『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです。』

（えっと……確か船越先生と言えば４０過ぎても独身で今じゃ単位を楯に生徒に交際を迫るような教師ですよね……まぁでもあの根本ですし大丈夫でしょう。）

その後中堅部隊と凛は壊滅寸前まで追い込まれるも雄二率いる本隊の援軍で難を逃れた。

そして放課後、帰宅する生徒に紛れてＤクラスを奇襲する作戦に出た

「遂にこの時が来ましたか。」

Ｄクラスは代表と近衛部隊まで動員してＦクラスに対処しているが渡り廊下の戦いで半数近くを討ち取られているＤクラスは未だ３分の２を残しているＦクラスに押されていた。

そして今代表を守るのは僅か２人の近衛部隊のみ。

「これで決めます。Ｆクラス参謀諸葛凛！Ｄクラス代表及び近衛部隊に世界史で勝負を挑みます！」

「なっ後ろから！？」

『世界史　諸葛凛　１６２点　ＶＳ　平賀＆玉野＆塚本　１１０点＆９４点＆１０１点』

凛の召喚獣が突撃するも玉野と塚本の二人の召喚獣に抑え込まれる。

「ふう、少々ヒヤッとしたけど相手が悪かったね。」

「海老で鯛を釣る。」

「ん？」

「海老で鯛を釣るなんて諺がありますけど戦術的勝利は兎も角戦略

的勝利を掴むならエサは大きいほど
いいと思いませんか？」

「……まさか！」

平賀が振り向いたその時、すでに彼は平賀を射程圏内に収めていた。

「Ｆクラス中堅部隊隊長吉井明久！Ｄクラス代表に勝負を挑む！」

「しまっ」

『世界史　吉井明久　７８点　ＶＳ　平賀源二　１０９点』

点数的には有利だったが明久の操作性、不意を打たれた事、更に近衛部隊を退けた凛の援護もあり平賀は討ち取られた。

第４話

問題
以下の意味を持つことわざを答えなさい。
『（１）得意な事でも失敗してしまう事』
『（２）悪い事が起きた上に更に悪い事が起きてしまう事の喩』

姫路瑞希の答え
『（１）弘法も筆の誤り』
『（２）泣きっ面に蜂』

教師のコメント
正解です。他にも（１）なら”河童の川流れ”や”猿も木から落ちる”、（２）なら”踏んだり蹴ったり”や『弱り目に祟り目”などがありますね。

土屋康太の答え
『弘法の川流れ』

教師のコメント
シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

『泣きっ面蹴ったり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

諸葛凛の答え

『（1）美周郎も琴の音を謝る』

『（2）弱り目に孔明』

教師のコメント

あながち間違ってない答えにどうしようか困惑しました。

さて、Dクラス戦は終了しました。

幸いこちらのジョーカーである姫路さんの温存に成功しているので恐らく次の戦いでも姫路さんがFクラスにいるかも知れないと思っても確定していないので警戒は出来ても対策は出来ないでしょう。

しかしまだ不安要素が残ります。
一段飛ばしでDクラスに挑んだなら恐らく次はBクラス……代表は私の情報網によるとあの根本。

彼は私と同じく頭を使った戦い方を得意とする人ですからね。
まあ方向性は全然違いますけどね。
私のが謀略策謀を得意とするなら彼は権謀術数を得意とする人間。
他人の足を引っ張ってまるで自分が優れているかのように見せるのが得意な人です。
このタイプの人間の強みは読み切るのが難しい事、私は戦場でしか使えませんが彼は逆に戦場では使えない策なので何時何処で如何してくるのかが全くわかりません。
古来より暗殺が成功してきた理由は仕掛ける側が圧倒的に有利だから。
今回も彼の方がかなり有利な状況ですね……しかし、私は権謀術数は苦手ですが罠を張るのは得意なんですよ？

「雄二、私は少し外しますね。次のBクラス戦の布石をしてきます。」

「気づいてたのか。次の狙いがBクラスだって。」

「ええ、Aクラスを狙うなら次はBクラスしかありえませんからね。CクラスはEクラスに挑まなかったのと同じ理屈でしょうし。」

「流石だな凛。じゃあ任せるぞ。」

「はい。詳細は後ほどメールで。」

「おう。」

さて、代表の許可も取りましたし早速始めましょう。

翌日です。

罠はすでに張り終えました。

今は根本が打ってくるだろう策を先読みしたうえでBクラスに勝利する手段を考案中です。

「うーむ、地雷でも用意しますか？いえ資金的に厳しいですね……ならば催涙弾や閃光手榴弾……こちらは販売ルートの確保が……となるとやはり……」

「お前は一体どこと戦争するつもりだ？」

「やだなぁ雄二。決まってるでしょう？次のクラスですよ。」

「地雷やら催涙弾やら物騒なものを用意しようとしといてよく言う。」

そうはいいますがね、相手の五感を奪ったり動きを制限したりする武器は意外と戦争では……

「雄二、凛もお昼食べに行こうよ。」

「そうだな。今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな。凛、お前も来るよな。」

「そうですね。流石にお腹が空きました。」

腹が減っては良い策も浮かばないでしょうしちょうどいいですね。

「あ、あの。皆さん……」

おや、姫路さんが何か言いたげですね。

「うん？あ、姫路さん。一緒に学食に行く？」

「あ、いえ。え、えっと……、お、お昼なんですけど、その、昨日の約束の……」

「おお、もしや弁当かの？」

「は、はいっ。迷惑じゃなかったらどうぞっ。」

ほほう、例のお弁当ですか。
てっきりお流れになったものとばかり思ってましたが残っていたんですね。
しかし島田さんの気配が険悪に。

「むー……っ。瑞希って、意外と積極的なのね……。」
貴女も十分に積極的だと思いますけどね？
プロレス技とかプロレス技とかプロレス技とか。
「諸葛、アンタ何か変な事考えてない？」
「失敬な。私が考えているのは民主主義と社会主義のどちらにも属さない究極の国家体制は無いのかってこととグラビモスが強すぎるって事だけですよ。」
「十分変な事よ……」
おや？そうですかね？
「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上にでも行くかのう。」
「そうだね。」
「じゃあ俺は飲み物を買ってくるから先に行っててくれ。」
「ウチもいく。一人じゃ持ちきれないでしょう。」
雄二と島田さんが飲み物を買ってくるまでに屋上に陣取っておきましょう。
屋上には幸い誰もいないので私たちで独り占めです。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

『おおっ！』

くっ！何が自信ないですけどですか！見た目はかなり美味しそうじゃないですか。

羨ましいですね……私はあんまり料理が上手くないので羨望一色です。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に（ヒョイ）あ、ずるいぞムッツリーニっ。」

パタン　　ガタガタガタガタ

え？

あ……ありのまま今起こったを話します！『康太が姫路さんの作ったエビフライを食べたと思ったら倒れて痙攣を始めた』何を言ってるのかわからないと思いますが私にも何をされたのかわかりません！頭がどうにかなりそうです。異物が混入してたとか不意打ちとかそんなチャチャなもんじゃ断じてありません！もっと恐ろしいものの片鱗を味わいました……

「おう、待たせたな！へー、こりゃ旨そうじゃないか。どれどれ？」

あ、バカ雄二！貴方には見えないんですか！？必死に姫路さんに向けて親指を立ててますが明らかに顔は青白くてブルブルと震えている康太の姿が！

バタン　　ガシャガシャン、ガタガタガタガタ

な……なんて事でしょう。細身の康太は勿論大柄で体の丈夫な雄二まで一撃で……

『毒を盛ったな』

『毒じゃないよ、姫路さんの実力だよ』

『私も保証します。決して毒を盛ったわけじゃありません……彼女の腕が殺人級だったんです』

『なん……だと……くそっだけならまだしも凛にまで保証されちゃあ信じるしかねえか』

『……くっ言い返したいけど凛への信頼度を考えると反論できない！』

「あ、足が……攣ってな……」

雄二……貴方も彼女を傷つけない為に……

「あはは、ダッシュで階段昇り降りしたせいじゃないかな。」

「うむ、そうのなのじゃ。」

「大丈夫ですか雄二？足が攣るなんてツイてないですね。」

「そうなの？坂本ってこれ以上ないくらい鍛えられてると思うけど……何か隠してない？」

不味いですね……流石に島田さんにまでこれを食べさせるわけには……

「あ、島田さん。その手を置いてあるところさっきまで虫の死骸があったよ。」

「えぇっ！早く言ってよ！」

そういって屋上を後にする島田さん。

良かった、これで犠牲者を減らせますね。

『ＧＪです明久。』

『ありがとう、でもどうしよう。このお弁当。』

残すわけにはいきませんよね……残したら罪悪感で胸一杯でお腹いっぱいになりそうです。

『明久、今度はお前がいけ！』

『む、無理だよ！僕だったらきっと死んじゃう！』

『流石にワシもさっきの姿を見ては決心が鈍る……』

『ならば……ならば私が行きましょう！毒を持って毒を制す！知略によって多くを欺き策謀という毒で多くの敵を屠ってきたこの私が！！』

『ま……待つんだ凛！ここは雄二が！』

『なっ！バカ言え！俺にもう一度死ねというのか！』

『いざ！』

「姫路さん！あれはなんでしょう！」

「えっ？なんですか？」

（うおおおおおおおお！！！）

『『『り、りーーーーん！！！』』』

手に持っていた箸でお弁当箱の中のおかずとご飯を口の何か詰め込みます。女子としては褒められる姿ではありませんがこの際仕方ありません！

ふむふむ、表面はガチガチ中はドロドロこの舌が焼ける様な感じがなんとも言えない痛みを……

「……ご馳走様でした。」

「一体何が……あれ？」

「……ああ、すみません。見間違いでした。それとお弁当ですが美味しそうでしたので皆で手を出してもう無くなっちゃいました……」

「そうなんですかー、嬉しいです。」

「……いえいえ、私たちも貴重な体験をさせていただきました……」

「あ、そうだ。私デザートも作ってきたんです。」

「「「「！？」」」」

「あ、ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れてしまいました。取ってきますね。」

「……凛、大丈夫なのか？」

いけませんね……視界が暗転してきました……

「ええ、問題ありませんよ。この程度で逝くほどこの私諸葛亮は鍛えてませんですのよ。」

「駄目だ雄二！凛が……凛が壊れた！！」

がががが……何を言ってるんですか吉明……私はこんにあも元気でふよ？

「駄目じゃ！目が虚ろでこっちを見ておらん！」

「ふふっ……天命……とは……かくも残酷な……ものなのです……ね……」

「凛！しっかりしろ！！」

「りーーーーーーん！！」

今なら……星が掴めそうです……

「はっ！」

「おおっ！気が付いたか凛！」

「良かった！安心したよ。」

「うむ。譫言で戦いの指揮を執り始めた時はどうなるかと思ったが、無事で何よりじゃ。」

……そうか、私は姫路さんの手料理を食べて……うっ！

「な……何だったんですかあれは！？それにデザートの方は大丈夫でしたか！？」

「ああ……うん、3人でね……頑張ったよ。」

「まさか3人で分け尚意識を奪われるとは思わんかったが……」

「あれは食いもんじゃない。ただの生物兵器だ。」

この3人にここまで言わせるなんて……姫路さん、恐ろしい子！

「……ところでここは？」

「えっと凛の家。勝手に上がらせて貰っちゃたけど。ごめんね。」

「大丈夫です。気を失った私を気遣ってでしょうし、見られて困るようなものはありませんし。」

「普通は嫌がると思うんだがな……ガードの緩い奴。」

雄二が何か言ってますがまだ頭がぼんやりしてますね……威力が酷過ぎるでしょう。

「とりあえずBクラス戦は明日だ。やれるか？」

「愚問です、雄二。当然でしょう。」

「そうか。だが無理はするなよ。一応ムッツリーニに各種工作を頼んでおいた。お前の言う策はほぼ完璧だ。」

「そうですか。なら安心です……では、そろそろ休みます。なんかまだ頭がぼんやりと……」

「そうだね、そろそろかえろっか。」

「ああ、また明日な。」

「養生するのじゃぞ。」

3人は部屋を出て玄関へと歩いて行くのが聞こえます。
え？鍵？それなら予備のカギを明久に預けてあるはずですから。

翌日

Cクラス

「全員注目！」

朝のCクラスに女性の声が響く。
教壇の前に立ち黒い髪をなびかせる女生徒が教室を見渡す。
「欠席者は無しね。昨日Bクラスから協力要請が来たわ。Fクラスを叩きのめすのに協力しろってね。これに味方するか否か、皆の意見を聞かせて。」
「Bクラスっていうたらあの根本が代表やな。」
「そうだにゃー。船越先生を呼び出すという猛者だにゃ。」
「大したもんや。俺でさえ船越先生には触手はのびんで。」
「え？青髪ピアス、お前ってなんでもいけるんじゃ？」
「それでも何故か反応せえへんのや。俺の熱いパトスが。」
「ふーんでっ！！」
「そこ！！無駄口叩くな！！もう一度聞くわ。Bクラスとの協力についてどう思う？」
「何故俺だけ！？」
女生徒の放ったチョークの一撃はツンツン頭の少年の額に命中し砕けた。
改めて
「ありえない。」

「Bと組んでもあんまし良い事ないだろうしにゃー。」

「せやせや、というか代表が女の子やあらへんのならむしろ俺が倒したる。」

他にもクラス中からBクラスの協力を拒む声が溢れる

「……じゃあ最後に一応多数決を取るわ。Bクラスに協力すべきと思う人……Bクラスと協力しないべきと思う人。」

ババッ

クラス全員の手が一斉に上がった。

「決定ね。ではこれより我がCクラスはBクラスに対し中立の体制をとります！」

Ｂクラス

「何故だ……何故なんだ！」

Ｂクラスに置いて一人の男が苦悩していた。
男の名前は根本恭二、Ｂクラスの代表である。
先日のＤＶＳＦの戦いの最中に行われた策略のせいで色々大事な物を失いかけた彼だが近所の独身の男性を紹介することで難を逃れていた。
しかしその策略の主がＦクラスだと分かると彼の中に恨みの炎が燃え上がりＦクラスを叩き潰そうと考えるようになった。
Ｆクラスが回復テストを受けていると聞いた彼は狙いがＢクラスである事に思い至り絶好の好機だと言わんばかりに策を練り始めた。

「敗北したＤは勿論脳筋共のＥクラスも期待してなかったが……何故Ｃクラスが非協力的なんだ！？くそっ！せめて代表が優香ならまだ手はあったのに。」

Ｃクラスの次席であり自身の恋人である小山優香の名前を出しながら悔やむが、残念ながらＣクラスの代表は彼女ではない。
更に言うと、Ｃクラスは学力的には問題ないが性格とかその辺を考えるとバカの分類に当たる者たちばかりである。
大勢や戦力差やら実益とかそんなのより”気に入らないから敵視する、好きな奴とは組む”精神の生徒が集結しているので恫喝恐喝は勿論揺すりもこましも効かない我の強いクラスなのだ。
おまけに何をやるにもバラバラなくせにいざ代表が指揮を執ったりイザって時になると異常なまでの結束を見せたりするのだが……それは後々。

「いや、焦るな俺。まだ手はある。厄介なのは代表である坂本と指揮官である諸葛だ。この２人を何とか出来れば俺の勝ちだ！……そうだ、Ｃクラスも俺たちに協力しなければならない状態に追い込めば……ふっふふふふ。見てろよＦクラス！後悔させてやるからな！ふはははははははははははははは！！」

第４話（後書き）

えー色々言いたいことがあると思いますがとりあえずＣクラス大幅改変です。
同時に根本が原作以上に追い詰められ小物っぽくなります。

もし根本ファンの方がいたらごめんなさい。

後凛の男に鍵なんか渡して良いの！？って思ってるかもしれませんが凛は雄二の言うとおり仲良くなるとガードが甘くなるんです。
幼馴染の明久なんて合鍵渡しても平気なレベルです。

第5話（前書き）

Bクラス戦です。

色々と省略してる部分がありますが見逃してください。

第5話

バカテスト

問題

以下の文章の（）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）である。』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もＲＰＧは好きです。

諸葛凛の答え

『熱』

教師のコメント

確かに熱を発しますが違います。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった。午後はＢクラスと試召戦争に突入する予定だが……殺る気は十分か？」

『おおーっ！！』

相変わらずＦクラスのモチベーションは最高潮であった。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。」

『おおーっ！！』

「しかしだ、残念なことに凛は今回別の任務で前線には出られない。
そこで今回は我がFクラスの切札である姫路を前線に投入する！」

「が、頑張ります。」

『うおおーっ！！』

癒し系であり自分たちでは一生届かない高嶺の花のような姫路瑞希と共に戦えるとあってFクラスの士気は最大まで高まりつつあった。
古人は言う、”知略はあっても勢いにのる方がいい”
つまり自軍に勢いがあり士気も高いなら余計な策を巡らせるより勢い任せて突っ込んだ方が強いよってことである。
まさに今のFクラスはそれを地で行っている。

「皆さん！戦死を恐れず突撃なさい！そして華々しく活躍し散っていきなさい！そうすればかっこいいと思って寄ってくる女子が居るやもしれません！！」

『うおおっーーーっ！！！』

そこへ更に凛が火薬を投下する。
Fクラスの士気の高さは最早限界突破したと言っても過言ではない。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムと共にＦクラスの男子一（＋女子２名）が一斉に渡り廊下目がけて突撃していく。
予め凛が抜け駆けなどで周りの足を引っ張る愚か者はモテないと注意している為全員が殺気とヤル気に包まれながらも一つの目的の為に戦う統率の執れた軍になるという
ある意味奇跡のような状態で突撃していた。

そして渡り廊下の向こうにＢクラスの姿が見える。

「よっしゃー！敵が見えたぞ！総員戦闘準備！」

『うおーっ！ＭＩ☆ＮＡ☆ＧＯ☆ＲＯ☆ＳＨＩ☆ＤＡ！！』

「な、なんだあの士気の高さは！？」

圧倒的な殺意と殺る気を持ったＦクラスを前に思わずＢクラスは怯んでしまう。
そこには最下位クラスという格下を相手にした傲慢と注意するのは代表と軍師だけだという先入観による油断があった為なのは言うまでもない。

『総合　Ｂクラス　野中長男　１９４３点　ＶＳ　Ｆクラス　近藤吉宗　７６４点』

『数学　Ｂクラス　金田一裕子　１５９点　ＶＳ　Ｆクラス　武藤啓太　６９点』

『物理　Ｂクラス　里井真由子　１５２点　ＶＳ　Ｆクラス　君島博　７７点』

本来なら瞬殺されるのがオチであり原作でもその通りなのだが……
これには異分子（イレギュラー）があり、
更に圧倒的な士気と勢いの差、そしてＢクラスの油断……これらの要素が組み合わさった結果。

『うおおおーっ！ぶっ殺せーー！』

『な……うわーっ！』

Ｂクラスの生徒は次々に討ち取られていく。
無論Ｆクラスの生徒も討ち取られてはいるのだが

「くそっ！なんだこいつら、少しも怯まない！」

「う、腕を斬りおとしたら口で武器もって襲い掛かってきやがった！」

「武器を弾いたら殴りかかってきたり絞めに来るってこいつら正気か！？」

正気かどうかと聞かれたら間違いなく狂ってるだろう。
だがしかしそれは狂わされたというより自分自身に狂化（バーサク）をかけている様なものであって
何が言いたいかと言うと彼らにとってこれは正気である。

「お、遅れ、ました……ごめ、んな、さい……」

「姫路さんが来たぞー！野郎ども！更に気合いをいれろー！！」

『ＹＨＡＡＡＡＡＡＡ！！』

「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」

「え！？は、はい！行って、きます。」

Ｆクラスを焚き付けて何事も無かったかのように話す明久に姫路は少し動揺するもすぐに前線へと駆けつける。

「あれ？姫路さん。どうしてここに？」

「Ｆクラスの姫路瑞希です。えっと、よろしくおねがいします。」

『は、はぁ』

現れたＡクラス相当の少女に戸惑いを隠せないＢクラス一同。
無論イベント会話の最中は攻撃しないなんて空気の読み方はＦクラスにはない。

「その……Ｂクラスに数学で勝負を挑みます。えっと……試獣召喚（サモン）です！」

「あれ？姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

「あ、はい。数学は結構解けたので……」

明久が疑問の言葉を更に投げかけようとしたところで

キュボッ！

一瞬でＢクラスの一部が燃え上がり消し飛んだ。

「あれはの、明久。腕輪と言って一定以上の点を取ると召喚獣に備わる特殊能力じゃ。
いくらワシらには縁遠いと言っても覚えておくもんじゃ。」

「あはは、そうだったね。」

『数学　Ｆクラス　姫路瑞希　４１２点　ＶＳ　Ｂクラス　岩下律子＆菊入真由美　１８９点＆１５１点』

瑞希の前に立ち塞がった女生徒二人も一人はあっさりと熱線に燃やされ一人は身の丈以上の大剣に真っ二つにされた。

「え、Ｆクラスに姫路瑞希だとおおおお！？」

「おいおいおい！話が違うぞ！注意すべきなのは坂本と諸葛って奴だけじゃないのか！？」

「それに他の奴らも聞いてたより手ごわいぞ！根本の奴、いい加減な情報掴ませやがって！！」

突然のＡクラス級の出現に動揺し混乱するＢクラス。
様子見の為１０人程度しか動員しなかったのが仇となり、瑞希の猛攻を前に壊滅した。

「よしっ！一気にＢクラスの教室まで進撃だあああああ！！」

『うおおーーっ！！』

Ｆクラス全３０名が一斉にＢクラス目がけて突撃を再開した。

一方Ｆクラスの教室では

「……情報通りだな。クラスには誰もいないぞ。」

「だけど本気でやるのか？筆記用具壊したり机壊したりって。器物破損じゃね？」

「仕方ねーだろ、代表様の命令なんだから。まあ気持ちはわかるぞ。どうせ船越先生を押し付けられそうになった仕返しだろうしな。」

「素でもアイツなら命令しそうだけどな！」

『全くだ。』

Ｆクラスに入ってきたＢクラスの男子７人。
どうやら誰一人として自分の意志で襲撃に参加した生徒はいないようだ。
だがしかし、迎撃する側としては何の変りも無いのだが。

「そこまでです。大人しく投降なさい。」

『！？』

振り返るとそこには１０人ほどのＦクラスの生徒と凛の姿があった。
更にその後ろには教師もたっている。

「既に退路は塞ぎました。悪い事は言いません、大人しく投降してください。そうすれば補習室送りは無しにしてあげますよ。」

「Ｆクラスの癖に生意気だぞ！全員ぶっ倒してやる！」

『Ｂクラス　藻蓋　喪武男　１４２点　Ｆクラス　諸葛凛　２４１点』

「んー、今回は少し調子が悪いですね。まあいいでしょう、戦死者一人追加です。」

凛の召喚獣の一閃でＢクラスの生徒は倒される。
他のＦクラスのメンバーも召喚獣を出す。

『Ｆクラス×１０　平均９０点』

「ここいるメンバーはＦクラスの中でも特に世界史を得意とし、そ

こに私が少しだけ教えた猛者揃い！
突破は不可能ですよ。」

「こ、こいつが諸葛……根本のヤロー、坂本も諸葛も引き付けるって言ってた癖に！」

一人がやられ、人数的にも不利で更に相手は自分たちよりも点の高い凛と
それなりの点を持つＦクラスの男子約１０名、勝率はほぼ０であった。

「降参だ！降参する！」

「俺もだ！そもそもこんな作戦乗り気じゃなかったんだ！」

「まだ未遂だしそれも嫌々だったんだ！」

「この通りだ！見逃してくれ！」

Ｂクラスの面々は次々と降伏しＦクラス襲撃は失敗となった。
Ｆクラスの生徒に命じて一応捕らえさせると凛は携帯を取り出す。

「もしもし雄二ですか？ええ、成功です。先ほど伝令係から連絡があって渡り廊下を制し現在Ｂクラス前で戦闘中だそうです。
短期決戦が可能ですが、どうしますか？……わかりました。」

連絡を終えた凛はＢクラスのメンバーを縛り終えた男子たちに向き合う。

「代表がＢクラスと停戦結んだ。４時まで戦闘し翌日はその状態か

ら再スタートという内容です。
ならば事前に状況を良くしておくのが重要、総員これより本隊と合流します！」

『御意』

「先生は彼を補習室に。」

「わかりました。彼らは？」

「今日の戦いが終わり次第解放します。」

「わかりました。」

凛一行は明久ら本隊と合流し疲労によって戦闘力の低下した瑞希の代わりに獅子奮迅の働きを見せ、
右側の扉を突破したところで停戦となった。

停戦後　Ｆクラス

「Cクラスに異常ありか。」

「……どうやら漁夫の利を狙っている模様。」

「ちっ厄介だな。」

停戦後、戦況と被害の確認をしていた雄二たちのもとにムッツリーニからCクラスに不穏な動きがあるとの情報が入った。
もしBクラス戦後すぐにCクラスに攻められれば当然のごとくFクラスは敗北する。

「しかし可笑しいですね。確かCクラスの代表はあの蕗寄さん、漁夫の利を狙う事は勿論自分たちから戦争を仕掛けてくるようなタイプでは無いはずなんですが。」

「そうか、Cクラスの代表はあの蕗寄か。そう考えるとこの件はBクラスの罠だな。」

「ちょっと、何でその蕗寄って人が代表だと罠なのよ。もしかしたらBクラスと組んでるかもしれないじゃない。」

「吹寄さん以外ならありえますが蕗寄さんだからこそあり得ません。彼女は知的委員長というより熱血委員長タイプですから根本のような悪評の多い人と組むはずがありません。
ついでに彼女は頭もいいですから安い挑発や讒言に惑わされることもないでしょう。」

「随分と信用してるのね。」

「島田さんも彼女と会えばわかりますよ。彼女は口が悪かったりしますが良い人ですから。」

「と言う訳でだ、これはBクラスの罠だという事が判明したが……一応手を打っておくできだろうな。」

という事で、雄二たちはCクラスに向かうことになる。
ちなみに秀吉も一緒だ。

「失礼する。Fクラスの坂本だ、代表はいるか？」

「私だけど、一体何の用？」

やってきたのは前髪で広めのおでこを隠した女生徒、蕗寄聖莉（ふきよせ せいり）がやってくる。

「いや何、何でもBクラスの連中がCクラスに向かったって聞いてな。
協定によれば明日の午前9時まで試召戦争に関する一切の行為を禁ずるって内容だったんだが……
若しかしたらそれが破られるかも知れないって思ってな。確認に来たんだ。」

「丁度いいわ。正直どうしようかと思ってたところだから。」

蕗寄の視線の先には動揺する根本と取り巻きの姿があった。

「さっきから協力しろだの、しないとFクラスを叩いた後Cクラスを攻撃するぞだの煩かったのよ。でも今の言葉で遠慮は要らなくな

ったわね。」

「ちなみに戦況は現在我らFクラスがBクラスを教室に押し込み扉も片方を破った状態です。」

凛の発言に残っていたCクラスの視線がきつくなる。

「なら、遠慮はいらないぜよ。」

「せやな。偶々残っといて正解だったわ。諸葛さんや姫路さんなんかも拝めたしなー。」

「そういう真似はあんまり好きじゃないんだよな、俺。」

そういって腕を回したり指を鳴らし始めた3人組に続いて他の生徒も手を開いたり閉じたりしたり、屈伸を始めるもの、掃除用具入れからモップを取り出すもの、竹刀袋の紐を解く者と全員がそれぞれの行動をし始める。

「く、くそっ！！覚えてろFクラス！」

根本とその取り巻きは脱兎のごとく逃げ出した。
その後を何人かのCクラスの生徒が追いかけて行く。

「すまんな、助かったぞ。」

「こっちも助かったからお互い様よ。諸葛さんも代表さんも頑張りなさい。」

「おう。」

「はい。」

その後教室に帰還したFクラスの面々は明日に備えて解散した。
当然ラブレター関連のイベントも無いのでBクラス戦は淡々と進んだ。
手始めにBクラス内に突入した部隊を凛が指揮することでBクラス内に防衛線を築くことに成功する。
続けて残っていた扉も瑞希を先頭に突破、FクラスとBクラスは教室内で向かい合う形で激戦を繰り広げた。
だがここで雄二の策が発動する。
予め朝のうちにDクラスによって室外機を破壊させエアコンを停止させて窓を開けさせた。
更にFクラスの大群が乗り込んできたことに焦り根本は近衛部隊さえも前線をまわしている。
今根本は窓を背に孤立している。

「今だムッツリーニ！！」

ダダン！

開け放たれた窓から体育の大島先生と土屋康太の二人が教室へと侵入する。

「……Fクラス土屋康太、根本恭二に保健体育で勝負を挑む。」

「な、なんだとおおおおおお！！」

根本はあっさりと敗北しBクラス戦は終結した。
その後根本はBクラス総出で女装させられたりするのだが……精神

衛生上非常によろしくないので省略とする。
ちなみに根本は成功すると言った策の失敗などでクラス内での発言力はほぼ0となり、凛や雄二に作戦を読まれ敗北したために賢い人が好みである小山優香からも失望されてしまうのだが……蛇足だろう。

第5話（後書き）

Bクラス戦終了。

本当に根本ファンの方はごめんなさい。
自分はアンチとかは基本しないんですが凛の知略を活躍させたらこんな感じに…
今後救済すると思います……多分。

第6話（前書き）

Aクラス戦です。

第6話

問題

以下の問いに答えなさい

（1）４ｓｉｎＸ＋３ｃｏｓ３Ｘ＝２の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するＸの値を１つ答えなさい。

（2）ｓｉｎ（Ａ＋Ｂ）と等しい式を示すのは次のどれか、？～？の中から選びなさい

？ｓｉｎＡ＋ｃｏｓＢ　？ｓｉｎＡ－ｃｏｓＢ

？ｓｉｎＡｃｏｓＢ　？ｓｉｎＡｃｏｓＢ＋ｃｏｓＡｓｉｎ

姫路瑞希の答え

『（1）Ｘ＝π／6

（2）？　』

教師のコメント

そうですね。角度を”。”ではなく”π”で書いてありますし完璧です。

土屋康太の答え

『（1）Ｘ＝およそ3』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちはわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『（2）およそ？』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

諸葛凛の答え

『（1）X＝π／6消した後2
（2）？消した後？』

教師のコメント

僅かに残っている答えがあっていたのになぜ消したんでしょうか。

諸葛凛のコメント

勘で答えて違ってるだろうと計算したらこうなりました。

Ａクラス戦当日。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたことにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している。」

「ゆ、雄二、どうしたのさ、らしくないよ？」

「ああ。そんなのは自分でもそう思うさ。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ。」

代表である雄二の言葉にＦクラスの生徒は全員が真剣な表情に変わる。

（流石雄二。他人を煽ることに関してはピカイチですね。あえてらしくない態度をとってまで
感謝することで全体の意志を纏めて更に士気まで上げる。見事な話術です。）

凛は真剣な表情の裏で独自の考察を纏めていたが雄二の演説は終わりに近づく。

「ここまで来た以上、絶対にＡクラスに勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

『おおーっ！』
『そうだーっ！』

『勉強だけじゃねぇんだー！』

「さて、Ａクラスとの試合だが。これは一騎打ちで決着をつけようと思う。」

Ｆクラス中で疑問の声があがる。
そこへ凛が雄二の隣に立って説明し始めた。

「皆さんの士気の高さ、奮闘具合であればＡクラスとも互角に戦えるでしょう。しかし残念ながら恐らくＡクラス代表霧島翔子、次席久保利光を討つには些か力が足りません。
姫路さんなら或いはと思いますがそこまで行くまでにこちらの損害は計り知れないものになります。
そうなってしまえばこちらの勝ち目はほぼゼロです。しかしあえて一騎打ちに持ち込むことで集団戦から個人戦になり個々の能力が物を言うようになります。
そうなれば、我らＦクラスの勝率は跳ね上がると言う訳です。」

凛の説明を受けてＦクラスの意気はさらに上がる。
Ａクラスへの勝率がかなり高い事が彼らに希望とヤル気を与えた。

「ところで誰がでるのさ。」

「それはもう決まっている。一つは俺と翔子だ。」

「バカの雄二が霧島さんに勝てるはずが……」

明久の顔の横をカッターが通り過ぎていく。
そして雄二は次段を構えると

「次は耳だ。」

「はいはい、そこまでにしてください。雄二がやると言ってるんです。勝算あっての事でしょう。ならば我らの代表を信じましょう。しかし、相手は2年の首席。不安があるのも道理です。勝算を教えてくれますね？」

「ああ。ルールは日本史のテスト。１００点上限あり、レベルは小学生だ。このテストである問題が出れば翔子は必ず間違える。」

「その問題とは？」

「”大化の改新”だ。この問題が出ればアイツは必ず間違える。そうすればシステムデスクは俺たちのものだ！！」

『うおおおーーーーっ！！』

雄二の言葉にFクラスの男子が雄叫びを挙げたところで姫路が挙手をした。

「あの、坂本君。」

「ん？なんだ、姫路。」

「霧島さんとは、その……仲が良いんですか？」

「ああ。アイツとは幼馴染だ。」

「総員、狙えぇっ！」

Ｆクラスの男子は一斉に上履きを構えて雄二に向ける。
無論横にいた凛は明久に引っ張られて安全地帯に連れて行かれた。
「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」
「黙れ、男の敵！Ａクラスの前にキサマを殺す！」
「俺が一体何をしたと！？」
「遺言はそれだけか？……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それは押さえつけた後口に押し込むものだ。」
「了解です隊長。」
「くっ！もし幼馴染がいるってだけで殺されるなら明久だって凛と幼馴染だろうが！！」
『総員、狙えぇっ！』
明久は雄二の前に突き飛ばされ上履きに狙われる。
「くっ雄二キサマ！僕をはめたな！」
「何言ってやがる！お前こそ！！」
雄二と明久の醜い言い争いが発生しそうになったとき、姫路が声をかけてきた。
「あの、吉井君。吉井君は霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ。美人だし。」

「……」

「え？なんで姫路さんも僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険な物を投げようとしているの！？」

「はぁ……ヤレヤレです。」

結局この騒ぎは呆れた秀吉に止められるまで続いた。

時は進んでＡクラス戦。
交渉の末負けた方が勝った方の言う事を聞くという約束を取り付けたうえで試合が始まろうとしていた。

「一番手は凛だ。お前なら科目次第でＡクラスともやりあえるし俺の策も見透かしてるだろ？」

「ええ、ある程度は。」

「なら心配はいらんな。頼むぞ凛。」
「ふふっ私の策は万全です。では、行ってきます。」
「おう。」
凛はゆっくりと教室の真ん中へと歩いて行く。
そこに待っていたのは秀吉の姉である木下優子だった。
「Fクラスの癖にD、Bを打ち破ったのは褒めてあげる。だけどいいの？どっちにしろ奇策で勝ったアンタらがAクラスに正面から挑んで。」
「逆ですよ。全体の平均点で劣っているからこそ奇策を弄したんです。個に置いてまでAクラスにFクラスが劣っていると考えるのは早計ですよ。」
「言ってくれるじゃない。諸葛亮みたいな名前してるくせに前線に出てくるなんて……え？」
突然凛の様子が変わりどす黒いオーラを放ち始める。
その様子に思わず優子も尻込みする。
「やばい！凛が極悪モードに！」
「明久よ、極悪モードとはなんじゃ？」
「凛はあの呼ばれ方が大嫌いなんだ。
呼ばれると怒って暴走する……それが極悪モード！」

「ふっ……ふふふふふ……この私を諸葛亮呼ばわりした事……後悔させてあげましょう！」

「くっ！いいわ、叩き潰してあげる！科目は世界史よ。試獣召喚！」

「ジョウ等デス。捻り潰して晒してあげマスよ。試獣召喚」

『世界史　木下優子　３９７点　ＶＳ　諸葛凛　３９９点』

現れた召喚獣もまたまがまがしいオーラを纏っている。
しかし、何よりもその点数がＡクラスを恐れさせた。

「この私より点数が上ですって！？」

「ククク……世界史は私の得意科目なんですよ。さあ死ね！無様に敗北し無残な屍を晒せぇ！！」

凛の召喚獣は素早く優子の召喚獣に突っ込んでいく。
対する優子も西洋風のランスを構えて迎撃の体制に入る。
得物の長さにおいては優子の方が圧倒的に有利で、更に威力も切れ味が並みの凛の武器に対して優子のランスの破壊力は凛を上回っていた。

（焦る事は無いわ。有利のなのはこっち、焦らず確実に）

優子はランスを小刻みに放ち近づけさせない戦法をとる。
凛の召喚獣はそれらを紙一重で躱しつづけ距離こそ詰められないが一撃も貰わなかった。

「やりますね……仕方ありません。」

凛の召喚獣は一足飛びに距離を取る。

『木下裕子　３４１点　ＶＳ　諸葛凛　３５４点』

「なっ！？どうして私の点数がこんなに！？」

「気づきませんか？私が少しずつ後退していたのに、貴方が少しずつ前進していたことに。私は移動だけに点数を消費しますが貴方は攻撃と移動の両方に点数を消費しました。
故に私が有利。ふふっこのままいけば貴方は自滅しますね。」

「だったら、こっちから攻勢に出るまでよ！」

「あっはははははは！！上等ですね！カウンターを決めてあげましょうか？それとも捻じ伏せてあげましょうか？」

突っ込んでくる優子の召喚獣をいなして的確に斬撃を加えていく凛。
だが明久の表情は焦るばかりだった。

「……有利。」

「ああ。むしろありがたいくらいだ。どうしてそんなに心配しているんだ？」

「極悪モードの凛は戦闘力こそ上がるけど代わりに冷静さを失うんだ……だからこの時の凛の予想と策の的中率は大幅に下がる！だけど凛は強気になっているからそれに気づけない。」

「……おい待て明久。じゃあこのまま行けば！」

「多分……凛が負ける。」

『木下優子　２１９点　ＶＳ　諸葛凛　３０７点』

「ほらほら、どぉしたんでぇすかぁ？最初の威勢がありませんよぉ！！」

「くっ！」

一気に距離を詰めた凛の剣は優子の首を掠めるにとどまった。
しかし急所に攻撃をくらったことで点数はかなり減ってしまう。

（このままじゃ負ける……いえ、落ち着くのよ優子。確かに荒々しい攻撃だけど同時に精細さを失って彼女自身冷静じゃない、ここは）

優子の召喚獣は距離を取るとよろけた様に膝を着く。

「さぁあ！遊びは終わりです！これでジ・エンドぉおおおおお！！！」

全速を持って突っ込んでくる凛の召喚獣に対して優子は冷静に迎えうつ。

「そこぉおっ！」

「なっ！？」

片膝を着いた状態から前へと飛び出した優子召喚獣、そのランスは

真っ向から凛へと向かい凛も咄嗟に武器を優子の召喚獣に投げつけた。

「……」

「……」

「……私の勝ちね。」

「……ば…かな。」

『木下優子　２９点　ＶＳ　諸葛凛　０点』

優子のランスは凛の腹部を貫き、凛の剣は優子の右胸に突き刺さっていた。

「勝負あり、Ａクラスの勝ち！」

歓声の沸き起こるＡクラスに対して凛はその場に膝を着いていた。

（負けた……点数のアドバンテージ機動力に操作性、その他も私が有利だった。確かにリーチと破壊力は負けていましたがそれでも私の有利は変わらない。なのに負けた……）

唇を噛み締めながら凛はＦクラスのもとへと戻った。

「すみません皆さん……負けてしまいました。冷静さを失って負ける等軍師失格です。」

「そんなことねえさ。」

「雄二……」

「うむ。むしろFクラスなのにAクラスの点数を上回ってあそこまで追い込んだのは賞賛すべきじゃろ。」

「秀吉……」

「……（コク）後は任せろ。」

「康太……」

「お疲れ様、凛。」

「明久……ごめんなさい。それと、ありがとう。」

ぽろぽろと涙を零す凛を後ろに下げて秀吉と美波に任せると雄二と明久はAクラスの方を見る。

「次は誰が行くべき？」

「……今回のルールに置いて科目の選択権はAクラスが2回に俺たちが3回だ。つまり相手にはまだ1回科目の選択権が残っている。」

「OK雄二。じゃあAクラスに選択権を譲ればいいんだね。」

「ほう、お前にしては頭が回るな。」

「凛があんなに頑張ったんだからね。僕も頑張らないと。」

「よし、行って来い明久！」

「おう！！」

対戦相手は大人しめな女子生徒の佐藤美穂。
しかしその眼にはＦクラスだからなどという油断は無い。
恐らくさきほどの凛の試合を見て油断ならないと思っているのだろう。
しかしならば全力で倒しに来ているかというとそうでもない。
相手はあの観察処分者、Ａクラスは少しだけ余裕を持っていた。

「それでは２回戦を始めます。」

（僕の利点は操作性、欠点は点の低さ。長引いたら勝てない！ここは速攻だ！）

「科目選択は「Ａクラスに譲ります。」……わかりました、では佐藤さん。科目を。」

「は、はい。では物理で。」

「「試獣召喚（サモン）！」」

『物理　佐藤美穂　３８９点　ＶＳ　吉井明久　６９点』

鎖鎌を持った美穂の召喚獣に対して木刀の明久。
美穂は当然のごとく鎖鎌の鎌の部分を旋回させて明久に投げつける。

「貰った！」

「なっ！？」

明久はその鎖の部分を木刀で叩き木刀に巻き付けてしまう。
そして木刀を思いっきり引っ張ると驚いて力負けした美穂の召喚獣は明久の方へと飛ばされてしまう。

「おっらぁ！」

そしてカウンターの要領で美穂の召喚獣の顔面を殴って地面に叩き落とすと木刀による一撃を頭に加えた。

『佐藤美穂　３４１点　ＶＳ　吉井明久５３点』

（Ｄクラスならこれで一撃だったけど流石Ａクラス、全然効いていない。）

その後も明久は善戦するもＡクラスとの点数の差は埋めきれず

『佐藤美穂　２１０点　ＶＡ　吉井明久　０点』

「勝者、Ａクラス！」

遂には鎖による一撃を受け止めたときのダメージで戦死してしまった。

「あはは、あれが限界だったよ。」

「いや、見事だ明久。Ａクラス相手にあれだけ粘れば十分だ。」

「かっこよかったですよ明久君！」

「アキもやれば出来るんじゃない。」
暖かく迎えられた明久は頭を掻きながら次の試合を見守る。
続いて出て行ったのはムッツリーニ事土屋康太である。
対戦相手は。
「じゃあ僕が行こうかな。」
短髪のボーイッシュな雰囲気の女生徒が出てくる。
「科目はなんにしますか？」
「……保健体育。」
「土屋君だっけ？君、随分と保健体育が得意みたいだね。けど、僕もかなり得意なんだ。キミと違って、実技でね♪」
「……御託は良い、試獣召喚（サモン）」
「ありゃりゃ、ノリが悪いなー。そんなキミにはお仕置きだね。試獣召喚（サモン）！」
黒ずくめの衣装に短刀を持った康太の召喚獣に対し工藤愛子の召喚獣は巨大な斧を持っていた。
「理論派と実践派、どっちが強いか見せてあげるよ！」
愛子の斧に電撃が流れ始め猛スピードで康太の召喚獣に迫る。

「バイバイ、ムッツリーニ君。」

「……加速。」

斧が康太の召喚獣を両断するかと思ったその時、召喚獣の姿が消え代わりに愛子の召喚獣が真っ二つになった。

「……加速終了。」

『保健体育　工藤愛子　４４６点　土屋康太　５７２点』

『うおおおおおおお！！！』

Ａクラスを圧倒する点数にＦクラスから大歓声が沸く。

「そんな……この僕が……」

「……理論派は実践派に劣る。そんな事無いのはすでに凛が証明した。」

それだけ言い残すと康太は自陣へと戻る。

「流石ムッツリーニ！凄いよ！」

「……これで２対１。」

「ああ、これでチェックだ。姫路！任せたぞ。」

「は、はい！」

Ｆクラスの切札（ジョーカー）である姫路瑞希ＶＳＡクラス次席久保利光。
総合科目での戦いが繰り広げられるも瑞希は４０００点越えという霧島翔子に匹敵する点数を見せつけ勝利して見せた。

「最後の一人、どうぞ。」

堂々と教室の真ん中に向かう雄二と静々と向かう翔子。
両者は教室の真ん中にて向かい合う。

「科目は何にしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は１００点満点の上限ありだ！」

Ａクラスの担任の高橋先生がテストを取りに行く間にＦクラスのメンバーは雄二に近づいて行く。

「雄二、後は任せたよ。」

「ああ、任された。」

「……（ビッ）」

「お前の力にはずいぶん助けられた。感謝してる。」

「雄二、朗報を期待していますよ。」

「おう。期待してろ。」

戻ってきた高橋先生に連れられて二人は別室へと向かう。

そして教室のモニターに出題されている問題が映し出される。

『次の（）に正しい年号を入れよ』

（　）平城京に遷都
（　）平安京に遷都
（　）鎌倉幕府成立
（　）大化の改新

『日本史テスト　限定勝負　１００点満点

Ａクラス霧島翔子　９７点　ＶＳ　Ｆクラス坂本雄二　５３点』

「……雄二。」

「……無念。」

「ここまで来たんじゃが、惜しかったのう。」

「ミカン箱ですか……残念です。」

「ぐう……」

本来なら怒り狂いそうだが、いまのＦクラスは怒るほどの気力は無かった。

攻められるとばかり思っていた雄二はぐうとしか言えなくなっている

「……でも危なかった。雄二が小学生程度と油断してなければ負けていた。」

「……言い訳はしねえ。殺すなら殺せ。」

翔子の前で胡坐をかいて座り込む雄二の前に立った翔子は目線を合わせると。

「雄二……私と付き合って。」

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか。」

「……私は諦めない。ずっと、雄二の事が好き。」

「さて、みなさん。こっから先は代表同士の話し合いの様なので私たちは教室に帰りましょう。今日の反省会です。」

「おい待て凛！俺を見捨てる気か！？」

「……霧島さん、雄二をＦクラスの代表として連れ帰ってもいいでしょうか？」

「……ダメ、雄二はこれから私とデート。邪魔するなら……」

「……すみません、雄二。」

翔子が一睨みするとFクラスはモーゼの様に真っ二つに割れて出口への道を作った。

雄二は散々喚いたが結局連れて行かれてしまった。

凛視点

敗北ですか……うーん、惜しかったんですけどね。

しかしAクラス戦後に耐えていた鼻血が噴き出した康太に姫路さんと島田さんにデート（強制）に連れて行かれた明久と同じくデート（強制）に連れて行かれた雄二は大丈夫でしょうか？

……無事だといいんですけど。

明久は多分奢らされてるでしょうし明日はおにぎりでも持って行ってあげましょうかね。

雄二も……向こうは貞操の心配をすべきかもしれませんね。

この場合に嘆くべきか赤飯を炊くべきか……迷いますね。

まあどっちにしろ
西村先生が担任になる以上厳しくなるでしょうね。

第6話（後書き）

かなり長くなってしまったので後半はカット……ごめんなさい、凛の絡ませ方が思いつかなかっただけです。

後ムッツリーニですが凛と明久の奮闘で一種の覚醒状態になっていたので
鼻血を出しませんでした。
そういう事にしといてください。
せっかくカッコイイシーンが続いたので折るのはあれかなっと思ったんです。

次回からは清涼際編に入ります。

第7話　清涼際編（前書き）

大分間が開いてしまいましたが7話です。
今回から清涼際編に入ります。

第7話　清涼際編

清涼際アンケート1

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思いで』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。
写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（修正）成人向けの写真集』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのでしょうか。

吉井明久の答え

『凛が喜ぶもの』

教師の答え

おや、意外な答えが返ってきましたね。諸葛さんが喜ぶものですか、先生は思いつきませんが頑張って探してください。

諸葛凛の答え

『今はありません』

教師のコメント

吉井君の答えの後だととても残念に思えます。

既に春の季節は過ぎてもうじき夏になろうかというこの時期、文月学園は清涼際の準備に追われていた。

各クラスが独自の出し物を用意して準備してること、我らがFクラスはというと

「福村！こいっ！」

「勝負だ須川！」

「お前の球なんか、場外まで飛ばしてやる！」
男子の大半が外で野球に興じていた。
一方凛たちはというと
「死ねぇええ！雄二！」
「ふん、バカが！俺が対策を練ってないとても思ったか！」
「バナナでガード！？」
「お先に失礼するぞ。」
「……加速。」
「どうして二人はレースそっちのけでこうらとバナナの当てあいしてるんですか？」
「「そこに敵がいるからだ！！」」
「……本当にモンハンもってこなくて良かったですね。」
「うむ、この調子ではすぐに3乙しそうじゃしな。」
「……素材の取り合いが発生する。」
現在教室でＤＳのマリ●カートであそんでいた。
最初こそ凛が指揮を執ろうと思ったのだが、雄二のやる気の低さと

他の生徒の関心の低さを見て諦めてしまっていた。
結果、誰も指揮を執らないFクラスは野球をしたりゲームをしたりして暇をつぶしていた。

『全員教室に戻れ！この時期になってもまだ出し物が決まってないなんてうちのクラスだけだぞ！』

「っ！外で西村先生の声がしますね。そろそろ切り上げましょう。」

「「ちっ、運が良かったな。」」

「お主らは……」

そしてFクラス全員が教室に揃った。

「聞きなさい。現在Fクラスは清涼際の準備が全く進んでいません。その原因はやる気の無さだと思っている教師がいますが……まあ妥当でしょう。
先の試召戦争の様に利が無い。故に貴方たちはやる気が無い……しかし私は西村先生との交渉の末一つの道を手に入れました！それ

は今回の清涼際の売り上げで教室の設備を向上させて良いとの事です！」

『うおおおおおっ！！』

『流石諸葛さん、抜け目ないぜ！』

『そこにしびれる憧れるううう！』

「総員やる気と知恵を絞りなさい！ミカン箱？今時そんなもので勉強が出来るわけがない！私たちは少なくとも卓袱台と座布団を要求する！

しかしこの学校の教師は頭が固く聞き入れてはくれません！ならば自分たちの手でつかみ取るのです！学校机と椅子を！更なる設備を！さあ意見を出しなさい！私たちが更なる栄光を掴むために！！」

「ウエディング喫茶が良いと思います！」

「……写真館。」

「中華喫茶が良いと思う。」

凛の煽りによってかなりの数の意見が出たが最終的に最初の３つが候補となった。

写真館『秘密の覗き部屋』
ウェディング喫茶『人生の墓場』
中華喫茶『ヨーロピアン』

ちなみに書記は明久だ。

「では多数決を取ります！え、良し悪し？そんなもの一長一短に決まってるでしょう！
ならば素早く確実に多数決で決定します。文句や異論は清涼際終了後に原稿用紙に書いて提出しなさい！見るだけ見ます！」

「それって文句や異論は聞かないって言ってるようなもんじゃない……」

「問題はありません。では写真館……ウェディング喫茶……中華喫茶……では、多数決の結果中華喫茶となりました。総員全力を尽くすように。」

『イエッサー！』

「それならお茶と飲茶は俺が引き受けるよ。」

「……（スクッ）」

須川と康太の二人が立ち上がる。

「ムッツリーニ、料理なんて出来るの？」

「……紳士の嗜み。」

紳士の前に変態という名のがつくのでは？と凛は思っていたがあえて口にはしなかった。

「まずは厨房班とホール半に分かれてください。厨房班は須川君と康太のところに、ホール班は……明久、お願いできますか？」

「うん、任せてよ。」

「それじゃ、私はホール班に……」

「ダメだ姫路さん！君はホール班じゃないと！」

明久は姫路の言葉に即異論を唱えた。
姫路の料理は殺人級でありハッキリ言って耐性が低い、体の弱い人が食べれば間違いなく即死する代物である。
ちなみに本人は美味しいと思い込んでる……知らぬが仏とはこのことか。

「え？吉井君、どうして私はホール班じゃないとダメなんですか？」

「あ、えーっと、ほら、姫路さんは可愛いから、ホールでお客さんに接した方がお店として利益が痛あっ！し、島田さん！僕の背中はサンドバックじゃないんだよ！？」

「か、可愛いだなんて……吉井君がそう言うなら、ホールでも頑張りますね。」

出来ればホールだけお願いしますとは被害者たち談である。

「吉井。ウチは厨房にしようかな～？」

「うん。適任だと思う。」

「……」

「それなら、ワシも厨房にしようかの。」

「なら私も。接客より料理の方が得意ですし。」

「秀吉、凛も何をバカなことを言ってるのさ。そんなに可愛いんだから、もちろんホール班に決まってみぎゃあぁっ！し、島田さん！折れます！腰骨が！命に関わる大事な骨が！」

「……ウチもホールにするわ。」

「そ、そうですね……それが、いいと、思います……」

Ｆクラスの清涼際はやはりと言うべきか、ドタバタから始まったのだった。

凛視点

さて、ＨＲも終わって配置決めなども終わりました。

後は机ですね、流石にミカン箱を使う訳にはいきませんし……手を

打たなくては。

「おや？」

「雄二、逃がさない。」

「くっそおおお！！放せ翔ぐぎゃあああああああ！！」

……あれ？確か霧島さんって雄二の事が好きで告白したんですよね？
それなのにどうしてアイアンクローなんて決めてるんでしょう？

「ど、どうしてこうなった……」

「その声は凛か！頼む助けうぎゃあああああああ！！」

「雄二、浮気は許さない。」

う、浮気って……あれってＤＶとかそういうレベルですよね？
雄二の性格から考えてどこぞの優柔不断のクズの様にＮｉｃｅ　ｂｏａｔな展開は無いと思いますし、
ヤンデレっていうよりあれは本気でやってますよね。

「……雄二、清涼際にやる気を出すなら手を貸します。」

好機は最大限に生かす。
それが私のやり方です。

「出す！出してやる！だから助けろ！！」

何とかアイアンクローから逃れた雄二がこちらへと走ってきますが

……うわぁ、霧島さんの方が速いってどういうことですか？
まあ友達ですし、約束ですから助けますけど。

「……邪魔しないで。」

「そういう訳にもいかないんですよ。友達が困ってたら助けたくなる性分でして。」

「これは私たち夫婦の問題。」

「雄二は現在１７です。結婚できないので夫婦とは言えません。」

「愛さえあれば年齢や形式は関係ない。」

「それには同意します。けれども私の見た感じあまりにも一方的すぎませんか？」

「……逃げる雄二が悪い。」

「怪しげな薬を飲ませようなんてしたらふつう逃げるだろ！！」

……どうやら成績が優秀＝バカでは無いというのは嘘の様です。
霧島さんの行動はあまりにも常軌を超え過ぎてます。

「私の主観では、どうやら雄二に非は少ないようです……まあこの前の勝負に負けているのですから仕方ないかもしれませんが……やり過ぎです。」

「あなた、雄二の何？」

「友達ですよ。少なくとも私は親友だと思って……ます！」

「！？」

雄二の頭を掴もうとした右腕の手首をさっきまで掴んでいた私ですが今それを軸に霧島さんを投げ飛ばしたました。
とはいえ腕は掴んだままで痛くないように投げましたしどちらかと言えば抑え込む事を重視してますし。
ですから床に倒れた霧島さんの腕をひねりあげても問題ないんです。

「くっ」

「雄二にはこれから清涼際の指揮を執ってもらわなければなりません。」

「……雄二は渡さない。」

「雄二はあなたの所有物ではありませんので、あなたに許可を貰う必要がありません。故にあなたの許可はとりません。」

少々厳しい事を言ってますが生憎愛だの何だので他人に物事を強要するのは好きではないので。
それに雄二や明久には幸せになって欲しいですしね。

「さて、じゃあお願いしますね雄二。教室に明久や島田さんがいますので詳細はそっちで。」

「あ、ああ。わかった……やり過ぎるなよ。」

「……ええ、問題はありません。」

そういって雄二は教室に向かっていきます。
最後の台詞から考えて雄二は霧島さんを憎からず思っているのは確かですね。
しかし何かが理由に進めない、或いは拒否している。
一方の霧島さんは雄二に好感度マックスですがある意味優等生故に正しい恋愛を知らないのでしょうね。
そうでなければあんな暴行や薬なんて使う筈が……

「ふっ」

危ない危ない……咄嗟に離れなければスタンガンの餌食でした。

「……雄二は渡さない。あなたなんかに、絶対に！」

「あなたの雄二への愛の深さはわかりました。けれど愛は相手を縛るものであっても暴力や薬の使用への免罪符にはなり得ません。
雄二の友達として、あなたには一回挫折を知ってもらいます。」

「渡さない渡さない渡さない雄二のお嫁さんは私雄二は私のもの雄二は私だけのもの
他の女になんかに渡さない絶対絶対絶対私と雄二は永遠を誓い合った仲
友達如きが私と雄二の仲を裂けるわけがない裂くつもりなら消えて消えて消えて消えて」

うわぁ……マジなヤンデレになってますよ。
雄二、一体何があったんですか？
あの優等生で清楚という言葉が似合っていた霧島さんが見る影も無くなってます。

けどまあ

「羨ましいですよ……そうやって堂々と好きだって言えるのは。」

スタンガンを手に突っ込んでくる霧島さんと向かい合いながら私は呟きました。

意味なんて無いですけどね。

第7話　清涼際編（後書き）

凛ＶＳ翔子勃発

第8話（前書き）

翔子のキャラがぶれて来た……とりあえず清涼際中には戻るかと。

第8話

清涼際アンケート

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか？』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上１５センチ、胸元はエプロンドレスの様に若干強調しながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのものを用意し裏にはロゴを入れる。靴は５センチ程度のヒールを……』

教師のコメント

裏面までびっしりと書き込まなくても。

吉井明久・諸葛凛のの答え

『ブラジャー』『ブラザー』

ブレザーの間違いだと信じています。

「せいやっ！」

「……ふ」

廊下ではいまだに凛ＶＳ翔子の戦いは続いていた。
近接戦闘に置いては体を動かすことも多い凛が有利だが、翔子はスタンガンや怪しげな注射器を使用して決してインファイトに持ち込ませない為、苦戦を強いられていた。

「何度でも言いますよ、あなたの行動では雄二の心を掴むなんてできません！」

「そんなはずはない。雄二と私はいつでもつながっている。」

「ふざけないでください。雄二があなたに抱いている感情は恋でも愛でも無いんですよ。気づきませんか？雄二が抱いているもの、それは負い目です！」

弾かれるように数本の注射器が凛の髪を掠める。

「……これ以上私と雄二の侮辱は許さない！」

「上等です。ならその侮辱さえも虚構で独り善がりでしかない事を教えてあげますよ！」

二人は同時に飛び出すとスタンガンと握り拳を相手に向ける。
そしてそれが交差しぶつかり合おうとしたその時、

「やめんか貴様ら！！」

二人はやってきた鉄人に猫のように持ち上げられた。

「全く。凛、お前はFクラスでもまともな部類だと思っていたんだがな。霧島、Aクラス代表ともあろうお前がこんな騒ぎを起こすのは感心しないな。
で、何があったんだ。」

「「そっちが悪い。むっ」」

「……あなたが悪い。そもそもあなたが存在しなければ良かった。」

「はっ！愛だけでなく罪まで押し付けますか、随分と無責任ですね？Aクラス代表。」

「「……次は無い（ですよ）。」」

「やれやれ、お前らは。」

てつじ……西村先生までも呆れさせながら二人はそのまま睨み合っていた。
無論放したらすぐにでも戦い始めそうなのを見抜いた西村先生はそ

のまま掴んだままだが。

「とりあえず、諸葛の言い分を聞こう。」

「そこの無能が愛の押し売りと行き過ぎた体罰を行っていたので友達として止めました。まあ何割かは打算もありましたが……半分以上は友達、いえ雄二の為です。」

「ふむ。で、霧島。お前は。」

「そこの女が私と雄二……夫婦の団欒の時間を邪魔して雄二を盗ろうとしたから。絶対に許さない。」

「あー……何だ、霧島と坂本は付き合ってるのか？」

「本人が聞いたら断じて無いと断言するはずです。」

「……それは照れ隠し。私と雄二は愛し合ってる。」

「愛してる？笑わせてくれますね。一方的な愛は迷惑なだけ！さっさと理解しろ！」

「……泥棒猫の癖に。どうせあなたなんてピーでピーなピーでしょう。そんなピーが雄二に近寄らないで。ピーでピーなピーあなたの汚れが雄二に移ったらどうするつもり？」

「こ……の……ピーが！誰がピーでピーなピーだ！だったらあなたもピーがピーのピーでしょうが！あなたこそ雄二離れしたらどうですか？ピーがピーのピー！」

「「……殺す（します）」」

「はぁ……やれやれ、とりあえずお前らは補習室に来い。ここじゃ迷惑だ。」

「上等です。そこで白黒つけましょうこのピーがピーのピー！」

「……次の日の出は拝めないこのピーでピーなピー」

「「……死ねこのピー！！」」

「お前ら、自分が女子であることを忘れてないか？」

目の前で卑猥な言い合いをする女子2名に西村先生は溜息をついた。

「さて、これで店の方は完了だな。」

Ｆクラスは他のクラスより遅く始めたのにも関わらずＦクラスの団結力と雄二の統率力で手際よく準備を終えていた。

「凄い速く終わったわね。でもテーブルなんてどこで仕入れて来たの？」

「凛が予め教師たちに許可をもらって空き教室の机を使わせてもらえる様にしてもらったらしい。」

「相変わらず手際がいいわね、凛は。」

「ああ。アイツの手際の良さはおりがみつきだ。アイツには安心して重要な仕事任せられる。どこかのバカと違ってな。」

そういって雄二は視線を逸らす明久を横目で睨む。

「……何のことだい？」

「とぼけても無駄だぞ。もう秀吉に聞いたからな。お前、俺を呼ぶために翔子を使うつもりだったらしいじゃねえか。
ふざけんな！ただでさえ色々ヤバいんだからな！召喚大会の時は足引っ張んなよ！」

「そういう雄二こそへましないでよね！」

「誰に言ってんだテメエ！」

「雄二にだよ！」

「んだと！」

「やるか！」

「そこまでにせんか。せっかく準備した教室を荒らすつもりか。」

秀吉の仲裁を受けてようやく雄二と明久の言い争いは収まった。
実は凛が雄二を呼びに行く前明久は翔子を間に挟んで雄二を無理やりにでも参加させようと企んだのだ。
とはいえ、実行に移す前に雄二本人がやってきたので流れたのだが。

「てか、アンタたちも召喚大会に出るの？」

「え？あ、うん。色々あってね。」

明久は言葉を濁す。
何故なら明久と雄二は学園長から密命を受けており、召喚大会に優勝して賞品を手に入れなければならないのだが、
その事を誰にも言うなと釘を刺されているのだ。

「もしかして、商品が目当てとか……？」

「う～ん。一応そういうことになるのかな？。」

「……誰と行くつもり？」

「え？」

美波はずいっと明久に詰め寄る。
思わず後ずさりする明久だがそこへ瑞希まで参戦する。

「吉井君。私も知りたいです。誰と行こうと思っていたんですか？」

追い詰められた明久は頭をフル回転させる。
今回の召喚大会の賞品、それは如月ハイランドのペアチケットだ。
それだけなら問題はないのだが、そこには訪れたカップルは必ず幸せになれるというジンクスがあり、
企業が多少無理やりなことをしてもそれを本物にして客を集めようとしているのだ。
あまり頭のよくない明久だが2人がその事を聞いて来ているのは明らか、しかし明久はそれは学園長に渡すつもりで自分で使うつもりは全くないのだ。
しかしここで誤魔化さなければ尋問されて思わず吐いてしまうかもしれない。

「えっと、そう！凛と行くんだ。」

「「！？」」

明久にしてみれば咄嗟にしては良くできた嘘だった。
凛とは幼馴染で仲が良く、凛が遊園地のような場所にあまり行ったことが無い事も良く知っていた。
なので、以前の試召戦争時に頑張ってくれたお礼として一緒に行くのは不自然ではないと明久本人はそう思っていた。

だがそんなことは知らない2人は

「……まさか凛ちゃんまで明久君の事が？」

「……しかもアキから誘うなんて羨ましい。」

「っと、そろそろ時間だ。行くぞ明久！」

「うん。あ、秀吉にムッツリーニ！お店の方よろしくね！」

「わかったのじゃ。」

「……任せろ。」

秀吉と奥からお茶と胡麻団子を持ってきた康太に手を振りながら明久と雄二は会場に走り出した。
女子二人を勘違いさせたまま。

明久視点

「えーそれでは召喚大会第1回戦を始めます。3回戦までは一般公開もありませんのでリラックスして戦ってください。」

そういって先生はフィールドを展開する。

相手はBクラスの女子二人、どこかで見たような気もするけどそんな事はどうでもいいんだ。
とりあえず、敵は全部ぶっ飛ばす！

「では、召喚してください。」

「「試獣(サモン)召喚！」」

現れたのは似たような西洋風の鎧と剣を装備した召喚獣だ。

『数学　Bクラス　岩下律子　１７９点　＆　Bクラス　菊入真由美　１６３点』

流石Bクラス、僕なんかより圧倒的に点数が上だ。

「さて、僕らも召喚しようか。」

「そうだな。」

「「試獣(サモン)召喚」」

現れる僕らの召喚獣。
僕の召喚獣は改造学ランに木刀っていう不良スタイル。一撃必殺は無理だけど元々点数の低い僕からすればそんなのは狙ってないから寧ろ振り回しやすい木刀は願っても無い武器だ。

「それ、凛に言われた事まんまじゃねえか。」

「うるさいなぁ！そういう雄二の召喚獣は素手じゃないか！」

「バカが。良く見ろ。メリケンサックを装備しているだろうが！」
「雑魚だ！雑魚がここにいる！」
見た目も僕とあんまり変わらないし正直不安だ。
「行くわよ、修学旅行のお土産コンビ！」
「律子、違うよ。チンピラコンビだよ。」
否定……できない！
『数学　Ｆクラス　坂本雄二　１７９点　＆　吉井明久　６３点』
「ゆ、雄二！何時の間にＢクラス並みの点数を取れるように！？」
「前回の試召戦争で俺は大恥をかいた。それ以来俺はＡクラスに勝つために勉強を続けたんだ。
俺に……俺に次は無いんだ！次で勝たなければ！次で勝たなければ俺の人生は……俺の人生は……！」
「雄二落ち着いて！きっと幸せな家庭が築けるよ！凛だって協力してくれるだろうし！」
とりあえず雄二を落ち着かせて試合開始だ。
「律子！」
「真由美！」

「「行くわよ！」」
向こうの２人は名前を呼びながら僕らを挟み込むように移動してくる。
確かに見事なチームワークだ、だけど
ドガッ！
だからこそ読みやすい。
「な、なんで私たちの連携が！」
「どうしてＦクラスの癖にそんなに早いのよ！？」
僕がやったのは片方の顔面を木刀で叩いただけだ。
アイコンタクトならともかく声を出して合図するならタイミングは読みやすい。
軍師凛の元で鍛えられた僕にその程度のチームワークは効かない！
「やるな明久。ならここは任せるぞ。」
「無茶言うなバカ雄二！１対１ならまだしも２対１なんて無理に決まってるじゃないか！！」
「しょうがない奴だ。どれ、片方は俺がやってやる。」
そういうと雄二の召喚獣が歩きながら前に出る。
その動きを見た僕はいったん相手から距離を取る。

「落ち着いて律子、今のはまぐれに決まってるわ！」

「そうよね、私たちのチームワークが負けるはずがない！」

そういってまた挟むように突撃してくる二人、いや確かにタイミングとかも完璧だけどさ。

やっぱり声に出しちゃだめだよね。

「明久。」

「オッケー」

剣を構えた二人が背中合わせに立つ僕たちに左右から突撃してくる。

今だ！

僕の召喚獣は一背後の雄二≪・・・・・≫の頭の位置に向かって木刀を横なぎに払う。

雄二の召喚獣は体制を低くして木刀の下を潜り抜ける。

「「なっ！？」」

よって僕の攻撃は雄二を狙った子に、雄二の強烈なアッパーは僕を狙った子に直撃する。

流石の二人も動揺しているみたいだ。

「なんなのこの2人……まさか互いの気持ちがわかるとでも言うの！？」

あはは、面白い冗談だなぁ。

そんなわけないよね雄二。

「ああそうだな。ところでだ明久……お前、本気で狙っただろ。」

ちっ……流石にばれるか。

「あれだけ殺気付いてれば嫌でも気づくさ。」

「そっか、じゃあ次は殺気を隠さないと、ね！」

アッパーで打ち上げられた召喚獣を僕の召喚獣が木刀で叩き落として戦死させて、もう片方も雄二が思いっきり殴りつけて戦死させた。

そう、僕たちは学園最低コンビ。

僕たちをつなぐのは友情でも絆でも無い、殺すか殺されるか、或いは利用するかされるかだ！

第8話（後書き）

明日から3日間修学旅行の為更新できません。

とはいえこれまでの更新状態で3日以内に次が出ると思っている方はいないと思いますが念のため。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7183v/

バカと軍師と召喚獣

2011年10月1日05時04分発行